

山形県埋蔵文化財調査報告書第5集

堂の前遺跡

第1次調査報告書

山形県教育委員会

堂の前遺跡

第1次調査報告書

昭和50年3月

序

庄内平野の中でも八幡町・酒田市一帯は、史跡「城輪柵跡」などとくに平安時代頃の遺跡が密集している地域であります。

近年この地域にも、圃場整備事業など大規模な開発がすすめられ、地下に埋蔵されている文化財に重大な影響をもたらすようになりました。以前にも増して埋蔵文化財の適切な保存が要求されるところであります。

この調査は、その一つ八幡町堂の前遺跡の性格と範囲の確認を目的として、昭和49年度に国庫補助事業として実施したものであります。本書はその調査結果をまとめたものであります。今後の諸開発計画に際し、遺跡保存の資料として活用したいと思っております。

また内容的にも、古代の建築部材の発見など重要な遺構・遺物が検出されており、関係方面の研究の一助となれば幸いに存じます。

調査にあたって多くのご理解とご協力を賜わりました調査委員の先生方ならびに八幡町教育委員会をはじめ地元の方々に、心から厚くお礼申し上げます。

昭和50年3月

山形県教育委員会

教育長 赤星 武次郎



1 SB001 基壇出土陶磁器



2 第II層出土陶磁器

目 次

I 遺跡の環境	1
II 調査の経緯	3
1 調査に至るまでの経過	3
2 予備調査	4
3 第1次調査	7
III 遺構と遺物	11
1 遺構	11
2 遺物	18
IV まとめ	29

挿 図

Fig 1 遺跡環境図	1
Fig 2 予備調査第2トレンチ土層柱状図	5
Fig 3 遺跡地区割り図	6
Fig 4 163ライン土層模式図	8
Fig 5 第1次調査遺構位置関係図	10
Fig 6 SA001杭列実測図	11
Fig 7 SB002掘立柱遺構実測図	13
Fig 8 SB004掘立柱遺構実測図	14

Fig 9 SD001溝状遺構実測図	15
Fig 10 SX002石組遺構実測図	16
Fig 11 VIIA 66～68区実測図	17
Fig 12 出土木製品実測図	19
Fig 13 出土大斗実測図	20
Fig 14 出土肘木実測図	21
Fig 15 出土土師器実測図(1)	22
Fig 16 出土土師器実測図(2)	23
Fig 17 出土須恵器実測図(1)	24
Fig 18 出土須恵器実測図(2)	25
Fig 19 出土酸化炎焼成須恵器実測図	26
Fig 20 その他の遺物実測図	27
Fig 21 予備調査トレンチ実測図	折込
Fig 22 SB001基壇・SB003建物跡実測図	折込

図 版

PL 5	1 SB001基壇
	2 SB001基壇発掘風景
PL 6	1 SB002掘立柱遺構
	2 SB003建物跡
PL 7	1 SB004掘立柱遺構
	2 SB004掘立遺構柱根部
PL 8	1 SD001溝状遺構
	2 SD001溝状遺構覆土上面の遺物
	3 SD001溝状遺構内遺物出土状況
PL 9	1 SX002石組遺構
	2 VIIA 66～68区
PL 10	1 遺物出土状況(1)
	2 遺物出土状況(2)
	3 遺物出土状況(3)
	4 遺物出土状況(4)
PL 11	木製品
PL 12	土 器
PL 13	上 その他の遺物
	下 大斗、肘木

口絵1 予備調査第2トレンチ

- 口絵2 1 SB001基壇出土陶磁器
- 2 II層出土陶磁器
- PL 1 1 遺跡景観
- 2 第1次調査発掘区(部分)
- PL 2 1 予備調査第2トレンチ(部分)
- 2 予備調査第2トレンチ肘木出土状況
- PL 3 1 予備調査第3トレンチ
- 2 予備調査第4トレンチ
- PL 4 1 SA001杭列
- 2 SA001杭列掘下げ状況

例　　言

- 1 本報告は、山形県教育委員会が昭和49年度に国庫補助を得て実施した、山形県飽海郡八幡町法連寺に所在する歴史時代遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は昭和49年10月1日から同年12月8日まで行なった。
- 3 本報告では、昭和48年10月に行なわれた予備調査の報告をも併せて行なった。
- 4 遺物の実測整図は、木製品を佐藤庄一が、土製品は舟山良一が担当した。
- 5 写真撮影は尾形與典が担当した。
- 6 執筆者は夫々文末に記した。
- 7 実測図は夫々にスケールを示した。遺物写真はPL 11 の下段の他は $\frac{1}{3}$ に統一した。
- 8 編集は尾形與典が担当した。
- 9 調査を行なうにあたって文化庁、奈良国立文化財研究所、また後述の調査委員諸氏のほか下記の方々には多大なる御指導、御助言を賜わった。記して深謝の意を表したい。

山口重三（八幡町文化財専門委員）

小野 忍（酒田市教育委員会）

佐々木洋治（山形県立博物館）

（順不同、敬称略）

I 遺跡の環境

- 1 堂の前遺跡
- 2 茅針谷地遺跡
- 3 政所遺跡
- 4 願瀬山古窯跡群
- 5 泉谷地古窯跡群
- 6 城輪柵跡
- 7 明成寺遺跡
- 8 神矢田遺跡



Fig 1 遺跡環境図

堂の前遺跡は山形県飽海郡八幡町大字法連寺字堂の前に存する。

国鉄羽越線酒田駅より北東へ約8kmの水田中に位置し、北側・東側は出羽丘陵に囲まれその背後に出羽富士とたたえられる雲峰鳥海を仰ぎ見ることができる。西は直線距離にして約8kmで日本海に達し、南へ9kmほど下がると日本三大急流の一つ最上川に出る。穀倉地帯である庄内平野の北半部にあたる。

遺跡は出羽丘陵に源を発する日向川および荒瀬川の合流点近く、荒瀬川の旧濫乱原上にある。周辺の地質は第四紀の沖積層で、砂質土層を主とする。標高は約15mで西へ行くにつれて低くなるが、遺跡付近における高低差は約1mで、ほぼ平坦である。現在遺跡は水田として利用されており、用水路等に広く土師器・須恵器の散布が認められる。

付近の沖積地には、真西へ約1kmの出羽国府跡と推定されている史跡・城輪柵跡をはじめとして、歴史時代の遺跡が多い。北西へ約2.5kmの所には掘立柱建物跡を出した明成寺遺跡、北東へ県道を越えてすぐの地点には須恵器の散布地である茅針谷地遺跡、西へ600mの地点には同じく須恵器の散布地である政所遺跡などがある。

さらに、遺跡の性格に関連して注目しなければならない遺跡として、東部の出羽丘陵に存する古窯跡群があげられよう。それらは庄内東部丘陵地域古窯跡群と称されているが（註1）、現在でも山腹におびただしい須恵器破片の散布が見られる地点がある。中でも堂の前遺跡より東南6km付近の願瀬山、泉谷地の二ヶ所の古窯跡群は一部発掘調査もなされ注目すべき成果があげられつつある（註2）。

また、鳥海山頂には、『続日本後紀』承和5年5月11日条に初見し、『三代実録』貞觀18年条に「從三位勲五等大物忌神社ハ飽海郡山上ニアリ」と見える大物忌神社がある。そのロノ宮が本遺跡の北東約4kmの丘陵上、上蕨岡に位置していることも付記しておく。

（舟山良一）

註1 柏倉亮吉・伊藤忍「平野山古窯跡群」（寒河江市教育委員会、1970年）

註2 川崎利夫「酒田市願瀬山第1号古窯跡の調査概要」（庄内考古学I、1966年）

II 調査の経緯

1 調査に至るまでの経過

堂の前遺跡付近から木材や土器などの遺物が発見されることは、古くから地元の人々に知られていたが、遺跡の価値が初めて認識されたのは昭和30年のことになる。この年遺跡一帯に暗渠設置工事が行なわれ、工事中に多量の木材が発見された。同年八幡町在住の小野浩治氏らは、遺跡の重要性に鑑み地元高校生の手を借りて試掘調査を実施された。この調査では、井桁状に組まれた柱・長押（ナゲシ）・斗（マス）などの多量の建築部材および柵木、それに土師器・須恵器・田下駄・銅鏡などが発見されたという。現在、斗と土器・田下駄を除いてその所在が不明なものが多いのは残念である。なお昭和37年度刊行の「山形県遺跡地名表」（註1）にも重要遺跡として登録されている。

その後は若干の遺物採集がなされただけで近年に至っているが、昭和48年になって、遺跡付近に東北電力の送電塔の架け換え計画、八幡町一条バイパスの建設設計画が予定されたため、遺跡の範囲と性格の一部確認を目的として、昭和48年10月に八幡町教育委員会によって試掘を伴なう分布調査（今年度調査に対して、以下予備調査と呼ぶ）が実施された。この予備調査について既に報告がある（註2）が、遺跡の明確な範囲こそ捉えられなかつたものの、遺跡の推定範囲のほぼ中央部で建築部材が集中して発見され、しかもその時期が平安時代後半～鎌倉時代初頭頃と推定されるに至った。また水田用水路等における遺物の散布およびボーリング調査の結果から、遺跡の範囲が予想以上に広がっていることがわかった。付近に国指定史跡「城輪柵跡」や掘立柱建物跡の出土した明成寺遺跡が存することも考え合わせ、堂の前遺跡は改めてその重要性が確認されたわけである。

ところで上記の送電塔と一条バイパスの開発計画は、行政指導によって遺跡の推定範囲から外されることになったが、また新たに大規模な開発事業が昭和49年度より予定されることになった。庄内農業基盤総合整備パイロット事業と大規模県営最上川右岸圃場整備事業がそれである。両計画とも庄内地方北半一帯を含む広範な計画なため、堂の前遺跡の適切な保護対策を早急に立てる必要が出てき、今回の第一次発掘調査の実施に至った。

（佐藤庄一）

註1 「山形県遺跡地名表」（山形県教育委員会・1962年）

註2 「堂の前遺跡分布調査報告書」（八幡町教育委員会・1974年）

2 予備調査

調査期日 昭和48年10月15～17、同11月1日

調査主体 八幡町教育委員会、(協力)山形県教育委員会

調査員 柏倉亮吉(山形大学名誉教授)、山口重三(八幡町文化財専門委員)
相蘇親雄(八幡中学校教諭)、藤原岳良(八幡町教育委員会)
佐藤庄一(山形県教育庁文化課)

調査は3回に分けて行なった。第1回調査(昭和48年10月15～17日)はボーリング調査と試掘による遺跡の範囲確認、第2回調査(同10月24日)は遺跡の地形・地質の調査、第3回調査(同11月1日)はボーリング調査による遺跡の範囲確認を主とした。

ボーリング調査は、聞き込みおよび昭和30年度の調査によって存在したという角材列の検出につとめ、柵列等による遺跡の外郭線把握を行なおうとした。調査は十字形にボーリング地点を設定しほぼ1mおきにボーリングを行ない、さらに補足のボーリングを数ヶ所実施したが、角材列は確認できなかった。しかし遺跡の推定面積にくらべてボーリング地点が狭いことと、ボーリング棒の長さが1mしかなくその下が確認できないことを考えるとき、なお角材列が存在する可能性をもつ。

ボーリング調査の段階で木材が集中して埋没しているところが確認され、その性格を調べるために4地点を小試掘した。これを試掘順に1、2、3、4トレンチとする。試掘の結果2、3、4トレンチにおいて建築部材がほぼ全面的に検出された(Fig. 21)。

このうち2トレンチにおける層序は、Ia層—明褐色耕土、Ib層—青灰色微砂、IIe層—黄褐色粘土(盛土層)、IIIa層—濁青灰色粘土、IIIb層—青灰色粘土で、建築部材はIIIa層とIIIb層の間から発見された(Fig. 2)。他のトレンチの層序もほぼ同じである(註2)。

1トレンチは、40×40cmの方形で、幅10cm、長さ30cm、厚さ1cmの木材が1片出土しただけである。なお本トレンチだけは黄褐色粘土層が認められなかった。

2トレンチは、200×600cmの南北に長い試掘溝でほぼ全面に建築部材が検出された。建築部材は上面で最大10cmの高低差があるもののほぼ平らに並び、各部材の間隙に斗(マス)などをつめ込んだような状態で検出された。本トレンチで出土した建築部材は、斗(マス)肘木(ヒジキ)、長押(ナゲシ)など計26点があるがいづれも角状の面取りを施したものである。幅は15・18・30・33・45cmと一定せず、斗・肘木以外の建築部材の長さも21～40.2cmまで多様である。調査は建築部材の上面の検出のみにとどめたため、詳細は今後の調査にまたざるを得ないが、測定できた建築部材の厚さは、18・24・30cmの三種類があった。5号建築部材と6号建築部材に相欠き継ぎ様のかみ合いがあるほかは、建築部材どうしの重なり合いは認められない。また6号建築部材には、二ヶ所に鉄錆が打ってあった。

建築部材は青灰色粘土中に埋没していたため、保存は極めて良好である。

なお本トレンチの建築部材は、調査後すぐ埋戻しを行なったが1号建築部材(斗)と7号建築部材(肘木)の2点は、今後の調査を考慮して取りあげた(Fig. 18・14、PL13一下)。このうち7号建築部材の側面から墨書銘が認められたが、赤外線撮影等によても文字が判読できなかった(PL13一下)。

3トレンチは、100×140cmの南北にやや長い試掘溝で、幅15～21cmの東西に長い建築部材が4本検出された。建築部材の長さはトレンチ内だけで約65cm、厚さは表面の検出に留めたため不明である。

4トレンチは、55×45cmのほぼ方形の試掘溝で、南北に長い建築部材が2本検出された。

各トレンチの調査結果およびその付近のボーリング調査から、上記建築部材が埋没していると考えられる範囲は、東西10.5m・南北9.3ないし10.5mで、3トレンチ北側および2トレンチ南側がそれぞれ南北の限界を示すようである。形はおおよそ方形で、方向はほぼ真北に一致する。この部材は自然的なものではなく、廃材を意識的に敷いたものと考えられ、建築物の沈下を防ぐための筏地業と推定される。部材の上面の、盛土と思われる黄褐色粘土層の存在も、この推定を助けるものであろう。

予備調査で出土した土器は15片程度で、須恵器と所謂「須恵系土器」と呼ばれるもので、器形は壺・甕などである。壺はロクロ成形、無調整、平底で、器高に比ベ口径がやや大きい。甕は内外に叩き目をもつ。時期的には平安時代後半から鎌倉時代初期頃のものと推定されるが、上記遺物以外に3トレンチ上層で削り調整のある丸底風の須恵器壺が1点出土しており、一部はさらに古く遡る可能性をも有する。

(佐藤庄一)

註1 本稿は、「堂の前遺跡分布調査報告書」(八幡町教育委員会、1974年)を要約し、一部修正を施したものである。

註2 層位の名称は、第一次発掘調査の記述に書き改めた。

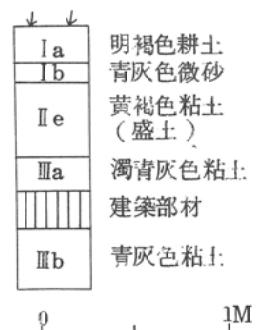
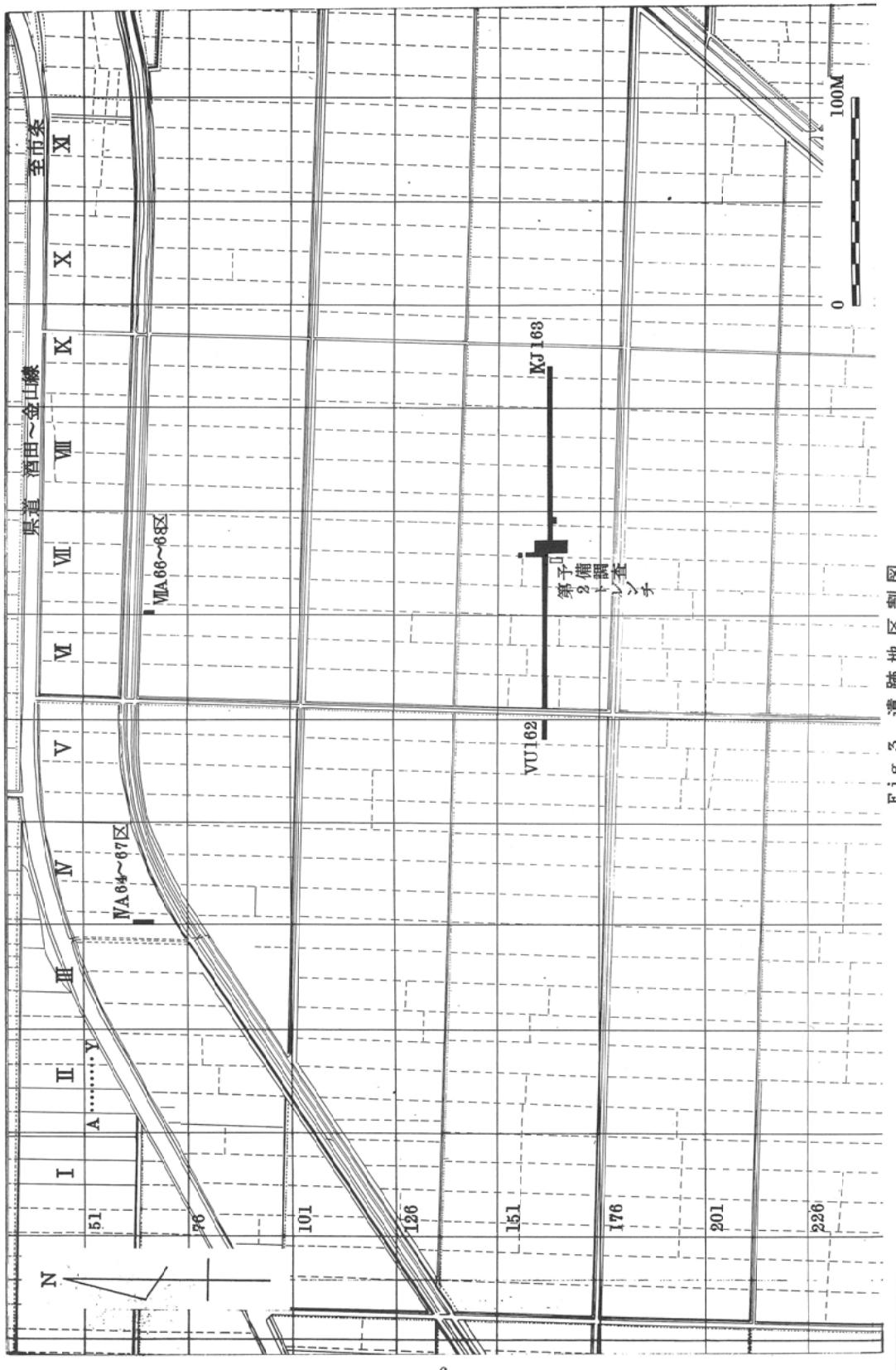


Fig. 2 予備調査第2
トレンチ土層柱状図



3 第1次調査

(1) 概要

本調査は、山形県教育委員会が国庫補助を得て、八幡町教育委員会の協力のもとに行なったものである。調査費用は総計400万円で県と国が半額づつ負担した。

第一次調査の目的は、前節で少し述べたように諸開発事業に対して、堂の前遺跡の性格と範囲を把握し、遺跡の適切な保護対策を図ることにある。具体的には、遺跡の外郭の確認を主目的とし、予備調査の際に発見された建築部材密集地に関しては、その上部遺構の存非確認に留めた。

調査は昭和49年10月1日から12月8日までのほぼ10週間にわたり実施したが、晚秋時の発掘調査となつたため、雨や雪、さらには湧水等に悩まされた。

調査には、教育庁文化課の尾形與典を主任とし、佐藤庄一、野尻侃、舟山良一の計4名が従事したが、このほか調査委員として、柏倉亮吉（山形大学名誉教授）、佐藤巧（東北大学教授）、岡田茂弘（宮城県多賀城跡調査研究所長）、川崎利夫（天童市立第4小学校教諭）、佐藤禎宏（酒田市立酒田中央高等学校教諭）の諸氏には、幾度となく現地に御足労をいただき適切な御指導を賜わった。この項を借りて感謝の意を表したい。

また地元の八幡町教育委員会はじめ作業員の方々には、多大な御協力をいただいた。合せて感謝いたしたい。

(2) 遺跡の地区割り

本遺跡の範囲はほとんど不明なので、地区割りを行なうにあたっては、暫定的なものとして次の方法を採った。

昭和48年度の予備調査時の第2トレンチのそばに15cm角の木杭を埋め、そのほぼ中央に釘をうちこんで、それを座標・レベルの原点とした。そこから真北(N-7°-W)にのびる線を南北基準線とし、さらに、原点をとおってこれと直交する線を東西基準線とした(Fig. 3)。

地区割りの範囲は、これも暫定的なものであるが、一応の目安として方6町を推定し、原点をほぼその中央においた。つまり原点から北に326mいき、さらに西に330mいった地点を当該座標の起点としたのである。

さて地区割りの詳細であるが、南北方向は、起点から南へ2mごとに1・2・3……121・122……区とし、東西方向は、起点から東へ50mごとにI・II・III……の大区を設け、それぞれをさらに2mごとに区割りして、西から東へA・B・C……Y区とした。これの呼称は、2m四方のグリッドを単位として行ない、たとえば、座標の起点を北西隅にもつグリッドはIA1区となる。なお、原点の座標はV P163である。(Fig. 22参照)

(尾形與典)

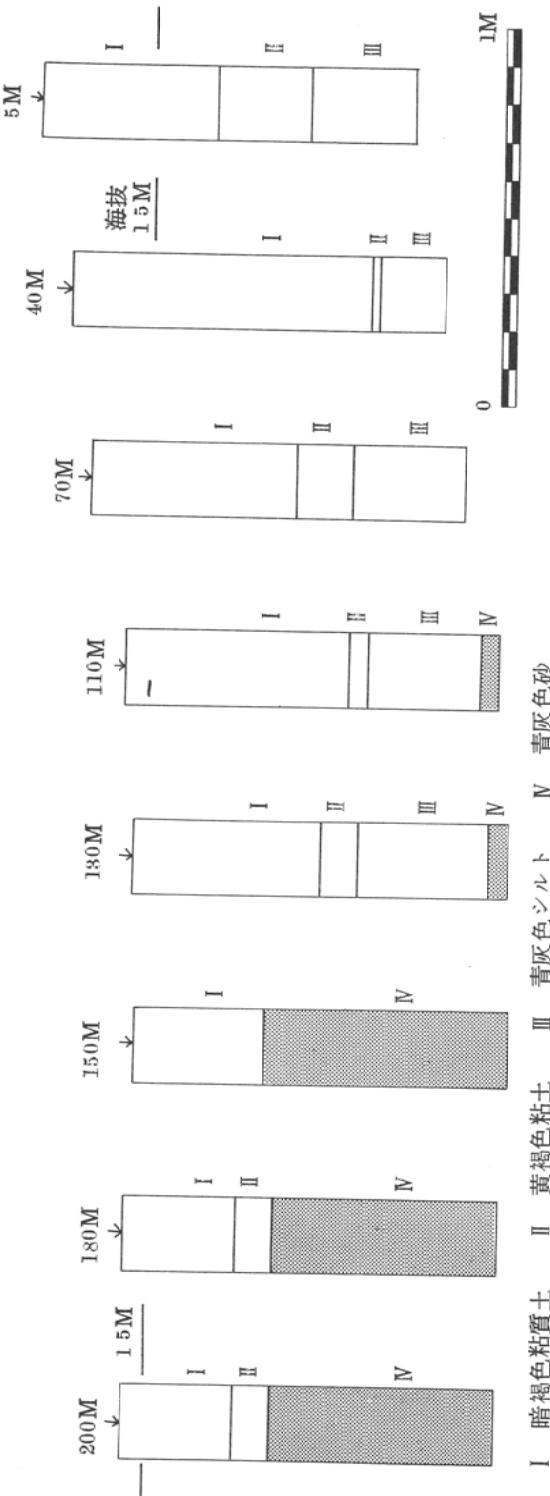
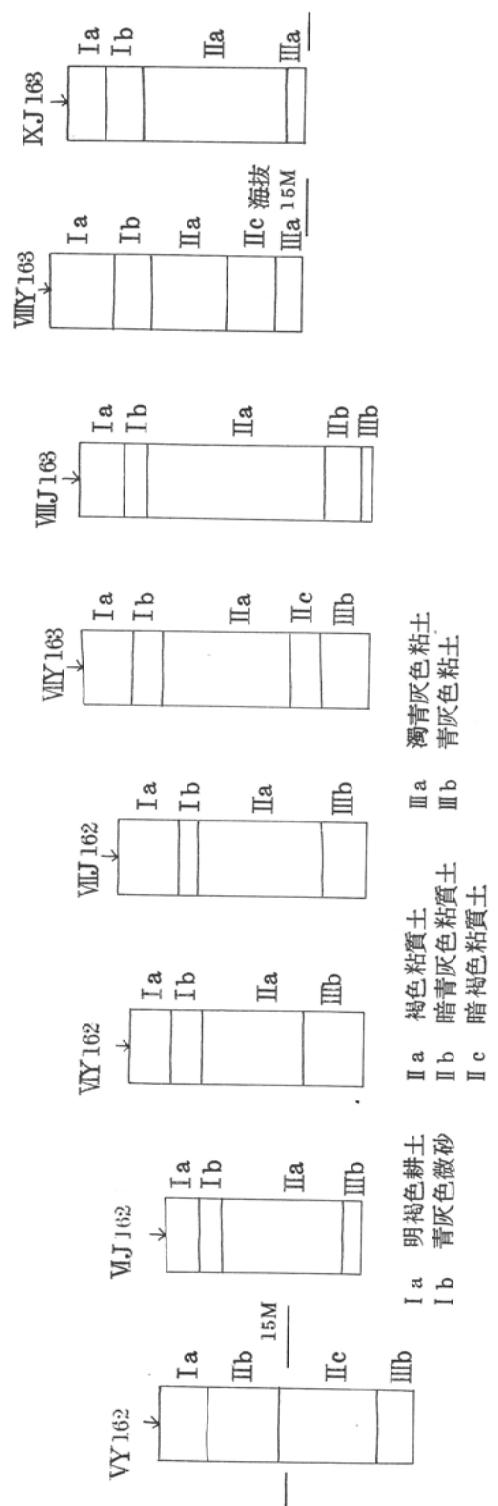


Fig. 4 163 ライン土層模式図

(3) 層序 (Fig. 4)

堂ノ前遺跡の層序は基本的には三層に分かれ単純な層であるが、さらに次のような細別が可能である。

第Ⅰa層 褐色土。耕作土である。

第Ⅰb層 青灰色土。微砂層で、水田の基盤をなす。Ⅰa・Ⅰb層あわせて約20cmの層である。

第Ⅱa層 褐色土。粘質土層で、乾燥すると非常に固くなる。30~40cmの厚さをもつ。VU~Y 162 区においてはこの層が見えない。

第Ⅱb層 暗青灰色土。同じく粘質土層で、VU~Y 162 区において現われる。厚さは約20cmである。

第Ⅱc層 暗褐色土。粘質土層で、VU 163 区より東においてⅡa層に続く層としては普遍的に見られる。厚さは10~20cmであり、地表面からは60~80cmを測る。土師器・須恵器の細片を多く含む。

第Ⅲa層 青灰色土。グライ化された粘土層で炭化物や遺物を含む。VU 163 区から東方において、無遺物層であるⅢb層の上に10~20cmの厚さで堆積している。

第Ⅲb層 青灰色土。Ⅲa層と同じグライ化された粘土層である。無遺物層である。地表面から80cmほどでこの層になる。発見された遺構はⅢa・Ⅲb層を掘り込んでいる。

次に、層序に関連して遺跡の西側の範囲推定の参考にするために実施したボーリング調査について述べる。

調査は、今回掘った東西に長いトレンチの西端VU 162 区からトレンチ延長上に西に、5mごとに200m行なった。その方法は1mの長さのボーリング棒を用い、まず地表面から70cmまでつきさして付着した土を観察し、次にその穴に1mまでつきさして観察し、次の地点に移るという方法をとった。その結果の一部を模式化したのがFig.4である。

調査によると、100m付近までは見られない青灰色砂が110m付近で現われ、それが130m~150mの間で地表面から35cmまで上がって来る。そして、そのまま200m付近まで続く。さらに、50cmほど任意にボーリング棒をつきさしてみたが、結果は同じであった。つまり、青灰色砂層が上がって来て、遺物を包含する上記Ⅱc層、Ⅲa層が見られなくなるわけである。

以上のことから、VU 162 区より西 150m付近以西には遺跡は延びない可能性があるのではないかということが考えられる。なお、48年度に行なった表面採集による遺物採集可能な範囲の西端がおおむねボーリング調査による結果と合致している(Fig.4)。

(舟山良一)

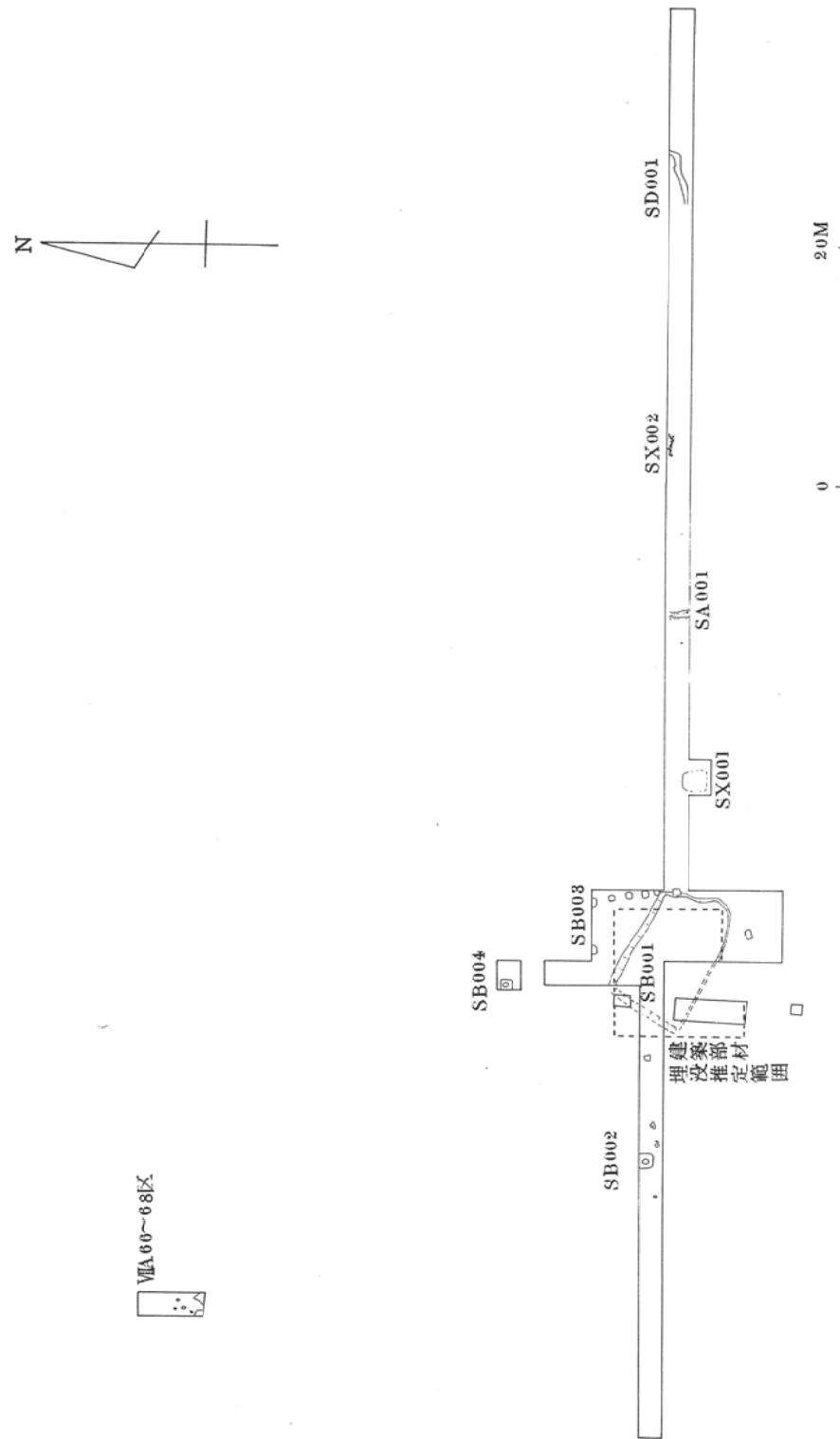


Fig. 5 第1次調査遺構位置関係図（VII 66～68区の位置は編集の都合により移動させた）

III 遺構と遺物

1 遺構

今年度の調査区は3ヶ所にわかれ、ひとつはVA 64～67区の4グリッド。ひとつはVIA 68～68区の3グリッド。もうひとつはVU 162区からXJ 163区にいたる112グリッド。合計119グリッドを発掘した（Fig. 3）。

今回の調査では、SB 002掘立柱遺構の西方には、遺物の出土は見るが遺構は認められず、遺構はSB 002掘立柱遺構の東、SB 001溝状遺構までの間に集中していることが観察された。グリッド番号でVIG 162～VIX 163区の間である（Fig. 5）。

なお、前後したが、遺構の標示に関しては、宮城県多賀城跡調査研究所で採用している方式（註1）に大略従ったが、一部変更を加えた。今回使用した記号についていえば、SA……柵・杭列、SB……建物跡（この中には基壇や掘立柱列などをも含ませることにした）、SD……溝、SX……その他、となる。このほか、散在するピットは個々に一連番号を付け、番号の前にPtというアルファベットを冠した。

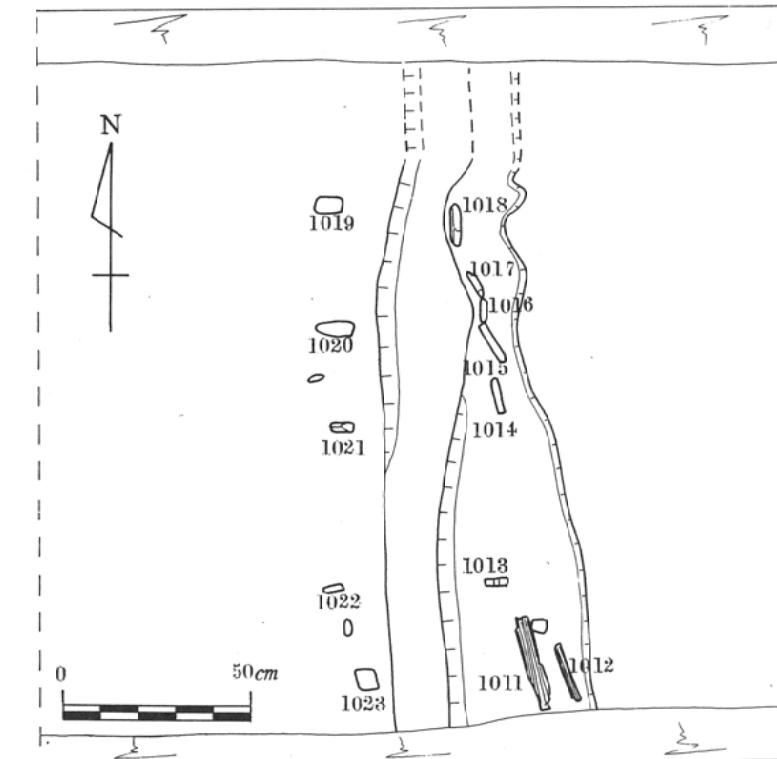


Fig. 6 SA 001杭列実測図

(1) SA 001 杭列

原点の東約29mの所を、ほぼ南北の方向に掘られた杭列を伴なう溝の跡である。発掘区の幅が2mであったため、その長さしか検出していない。溝は一部未検出の所もあるが二段になっており、西側が一段高くなっている。溝の幅は西側の最大値で53cm、最小値で30cm、北に行くにしたがって少しせばまる。東側の溝の幅は最大値で39cm、最小値で12cmである。深さは遺構検出面から東側溝で10~20cm、西側溝で2~8cmである。遺構はⅢb層一青灰色粘土を掘り込んで作られ、覆土は炭化物を含んだ暗青灰色粘質土である。この溝の東西西脇には、矢板および杭が部分的に列をなして検出された。矢板は東側溝の西壁に沿って6本検出され、そのほとんどが板状の木材を用い、先端をそいである(Fig 12参照)。

杭は西側溝の西方約15cmの所に5本検出され、横断面形が長方形を呈し、同じく先端がそいである。矢板および杭は、掘り方が認められず両者とも先端がそいであることから、おそらく打ち込んでいたものと思われる。なお矢板および杭については、遺物の項で後述する。また当遺構に関連する遺物は発見されなかった。

以上述べたSA 001杭列の性格はまだ不明であるが、杭については土留め等の機能が考えられるが、溝と矢板については八幡町一条地区付近に条里遺構の存在を推定する説もあり、今後の調査によってはそれに関連する水田の畦畔となる可能性を持つ。

(2) SB 001 基壇 (Fig 22, PL 5)

原点をほぼ中心として、予備調査時に確認された筏地業の上にのる基壇である。

東西方向に長く、やや平行四辺形を呈し、ほぼ南面する。南北軸は約30度東に偏する。南辺のほぼ中央部に河原石で組まれた階段らしきものが遺存するが、検出したのが一部分であるため、はっきりしない。

当該基壇は、東西約11m、南北約6m、高さ約20cmをかぞえるが、ノリ面がゆるやかであり、約24度の勾配をもつ。

基壇は黄褐色土によって構築されており、この黄褐色土は基壇の外側にも拡がっているがその範囲は現在のところ未確認である。基壇上には建物の痕跡は認められなかった。

この基壇の中軸を北方に延長していくと、日向川の右岸・上蕨岡の大物忌神社口の宮を経て、延喜式内神・大物忌の神の鎮座する鳥海山頂に至るということは、この基壇の性格を考える上でひとつの示唆ともなろう。

また基壇とその下の筏地業とは次の諸点から創建期を異にするものと考えられる。まず両者の中軸線が異なる点であり、大きさの異なる点であり、さらには筏地業の持つ性格より見た点からもいえるであろう。

予備調査で得られた資料によれば、当該地業は一辺約11mの方形を呈し、しかも部材は

南北方向を向いて敷かれている。一方SB 001基壇は上述のように東西方向に長く、しかも南北軸は30度程東に偏している。もし両者が同一時に建設されたものであれば、このような相違は生じにくいと思われる。ひるがえって筏地業について考えるに、一体筏地業とは、おもに湿地などで用いられ、建造物が陥没するのを防ぐためのものであり、当該筏地業のような木材を用いている場合は、当然のことながらその上部構造物はかなりの重量をもつものといえる。ところが基壇上には建物の痕跡は認められない。建物の無い基壇のみであれば、かような筏地業は不要ではなかろうか。

現在のところ、SB 001基壇は、筏地業を利用して二次的に造られたものであろうと考えられる。

今後の調査によってこの点を明らかにして行きたい。

(3) SB 002 掘立柱遺構 (Fig 7, PL 6-1)

原点から17m程西、VII G 162区で検出された掘立柱で、田畠の下から発見されたものである。掘り方は東西185cm、南北は検出できた範囲で104cmあり、胴張りのある方形を呈する。Ⅲb層から掘り込まれており、埋め土は炭化物を含む青灰色シルトの単一層によって構成されている。掘り方のほぼ中央に直径54cmの柱根が遺存しており、Ⅲb層上面から20cm程頭を出している。上端はかなりの腐蝕がみられるが、埋め土にとりまかれていた部分は明瞭に手斧の痕が観察できた。

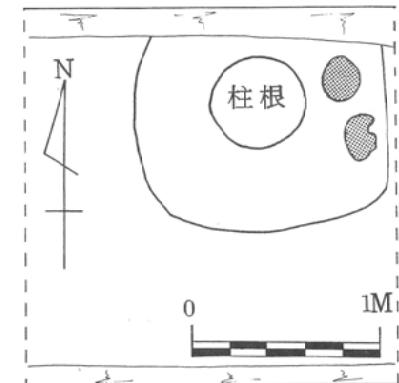


Fig 7 SB 002 掘立柱遺構実測図

掘り方上面より60cmほど掘り下げたが、湧水と降雨のため、掘り方の底・柱根の下端は確認できなかった。また、これと対応すべき柱の存在を確かめるべくボーリング調査を行なったが、確認できなかった。建物としての体裁をとり得ないので、当確遺構を上述のように掘立柱遺構とした。

(4) SB 003 建物跡 (Fig 22, PL 6-2)

原点のすぐ東に位置する建物跡で、検出範囲内で南北に14m程のひろがりをもち、SB 001基壇をその中に含むようにして位置する。

地表面に礫、炭、鉱滓などを敷き、つき固めたもので簡単な地上建築の基礎であろうと思われる。これの大きさや形はそれぞれ異なるが、大体一辺60cm程の方形と見ることができよう。

検出範囲から、南北棟桁行9間、梁行1間と推定され、南北軸は約6度西に偏する。東

側列で北から4間目の柱間が50 cmほどつまるほかは、各々の柱間は 150 cm程（約5尺）のほぼ等間隔である。梁間は 400 cmで、これは桁行3間分にはほぼ相当する。東側列の検出南端の基礎はSB001基壇の北東隅を削って構築しているようである。とにかく両者の遺存状況より見て、SB003建物跡はSB001基壇より新しいことは明確であるが、しかし、SB001基壇がまだ露呈していた時期に、これにかかるようにして建てられた建物とはどういうものであろうか。

(5) SB004掘立柱遺構 (Fig 8, PL 7-1)

原点から北に約13 m、VII N 156 区と VII O 156 区とにまたがって遺存する掘立柱で、SB002 掘立柱遺構と同じく、田畠の下から発見されたものである。

掘り方は、東西は検出できた範囲で72 cm、南北は 102 cmあり略方形を呈する。III b層から掘り込まれており、埋め土は炭化物を含む青灰色シルトの単一層によって構成されている。掘り方のほぼ中央に直径53 cmの柱根が遺存しており、約15 cmほど頭を出している。ここでも湧水に悩まされ、湧水による壁の損壊を防ぐため、掘り方の壁の若干内側を掘り下げた。掘り方上面より

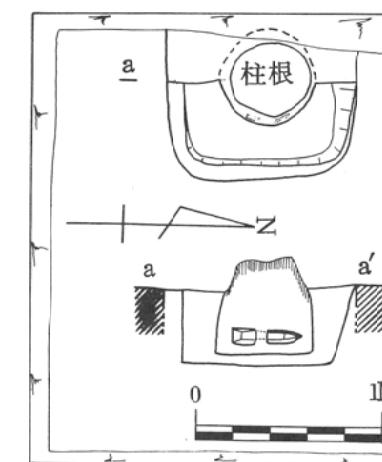


Fig. 8 SB004 掘立遺構実測図

36 cm程のところで柱根の下端を確認できた。それによると、柱根の遺存全長は約150 cmで、下端近くに2個（連絡を考えれば1個）の横長の目途穴が穿たれてあった。掘り方は42 cm近くまで掘り下げたが、湧水のため底を確認できないままおわざるを得なかった。

この付近にもボーリングを行なったが、対応すべき掘立柱の存在は確認出来なかつた。また、SB002掘立柱遺構とは、掘り方の形状、大きさ、柱痕の直径などから見て、別の遺構である可能性が大である。

(6) SD001溝状遺構 (VII V 163 ~ VIII X 163 区) (Fig 9, PL 8)

原点の東約6.8 mの所にあり、ほぼL字状の浅い溝である。検出した範囲で溝の長さは約4.5 m、幅は溝上部最大値で55 cm、最小値で30 cmを計る。溝はVII V 163 から北東に延び、中央で一部脹らんだのち VIII X 163 北東隅で北に折れる。遺構は

III a層一濁青灰色粘土を掘り込んで作られ、溝の深さは7~10 cm、断面は逆台形を呈し、覆土は土器・木炭を多量に含んだ濁青灰色粘質土である。溝の両端は発掘時の排水用溝を作る際に破壊してしまったため確認できなかったが、断面観察からもう少し伸びることが予想される。

当該遺構内からは土師器・須恵器がまとまって出土した。土器の器形には壺・蓋・甕・壺などがある。土器については遺物の項で後述する。

SD001溝状遺構の性格は、発掘地域がよくなお不明であるがその時期は出土遺物からみて平安時代を下らないものと推定される。

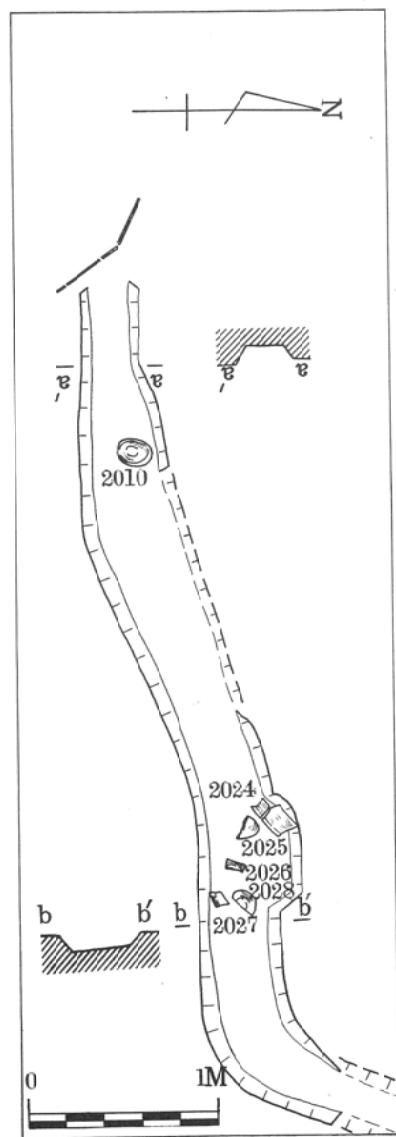


Fig. 9 SD001 溝状遺構実測図

(7) SX001 不明遺構 (VIIW 163 ~ X 163 区)

原点の東約14mの所にあり、隅丸方形の低い壇状の遺構である。検出区域内における当該遺構の大きさは、東西158cm、南北50cmでさらに南に伸びるものと思われる。断面は平坦な台形を呈し、高さは約9cmを測る。遺構はⅢ b層一青灰色粘土の上に暗褐色粘質土を盛って築かれ、上面に直径約20cmの円形の浅い落ち込みを数個もつがなお明らかでない。暗褐色粘質土の中からは長径約10cmの河原石が数個と多量の鉱滓が発見された。

当該遺構の性格については、発掘中途なため不明と言わざるを得ないが、近接発掘区よりフイゴの羽口片が2点発見されていることを加味すると、金属・中でも鉄等を小規模に加工する施設、たとえば鍛冶場遺構の可能性を有する。

なお上記遺物以外の土器等は発見されなかつたが、遺構上面より「永楽通宝」が1点発見されており (Fig 20)、当該遺構の時期決定の一資料となりうる。

(8) SX002 石組遺構 (VII L 163 ~ M 163 区) (Fig 10, PL 9-1)

原点の東約42m、VII L 163 ~ M 163区の北半に存する弧状の石組遺構である。長径約20cm大の河原石15個を弧状に並べており、その両端に幅5~10cm、長さ10~50cmの面取りのある板材4片が出土した。発掘区域内における石組遺構の長径は約180cm、短径は55cmである。当該遺構は、水田面下約100cmにあり、Ⅲ a層一濁青灰色粘土を約20cm掘り込んで作られている。石組遺構内の覆土は、掘方の両端が青灰色砂質粘土層、中央部が暗青灰色砂層で、いずれも掘り込み面に比べ砂質分が強いのが特徴である。木材以外の遺物の出土はなかった。

SX002石組遺構の性格は、まだ調査がその一部に過ぎないため不明な点が多い。ただ覆土の土質が砂性であることは、遺構内に水がしばしば入っていた結果によるものと考えられ、中に木材が入っていることと合わせて、井戸もしくはそれに関連する用・排水施

設等の可能性も考
えられる。

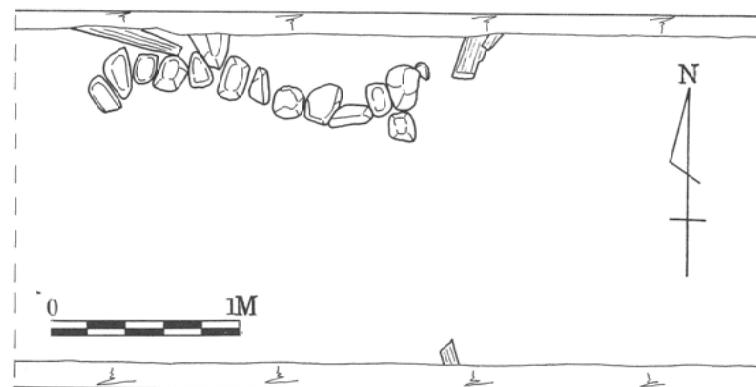


Fig 10 SX002 石組遺構実測図

(9) VIIA 66~68区 (Fig 11, PL 9-2)

原点の北約192m、幹線用水路のすぐ南側にある。本発掘区は10数年前出土したという柵列の確認を目的としたものであるが、結果として柵列は検出できなかった。しかし発掘区全域に黄褐色粘土があり、南側ではピットが6個発見された。各ピットは黄褐色粘土を掘り込んで作られている。なおVIIA 68区北側は用水路を作った際に一部攪乱されている。

このうち黄褐色粘土の深さは30cm以上あり、SB001基壇の盛土と同じ性格をもつものと推定される。ピットのうちPt1~Pt4は直径20~40cmの円ないし楕円形を呈し、深さは3~17cmである。覆土は木炭を多く含む暗褐色微砂層である。Pt5・Pt6はVIIA 68区南側で発見された大きな落ち込みであるが、調査区の設定上から部分的な検出に留まった。発掘区内におけるPt5の大きさは、東西50cm、南北70cmで隅丸長方形を呈す。深さは30cm。覆土は上層が黒色木炭層、下層が木炭を多く含む暗褐色微砂層で、土器は両層より多量に出土した。Pt6の大きさは、東西105cm、南北85cmの不正楕円形を呈し、深さは17cmである。覆土は木炭を多く含む暗褐色微砂層で、土器は少量出土した。土器は須恵器の杯・甕の破片がほとんどである。

上述したPt1~Pt4とPt5・Pt6の性格についてはまだ明らかでない。

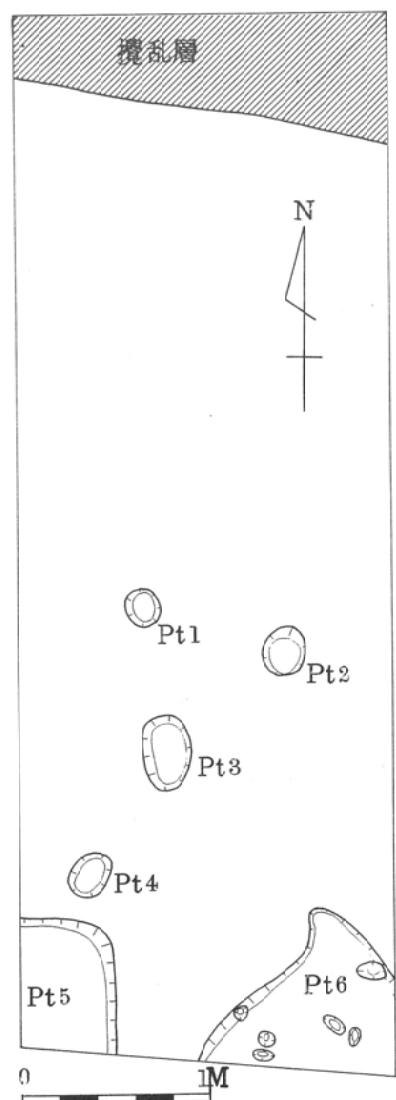


Fig 11 VIIA 66~68区実測図

(尾形與典・佐藤庄一)

註1 「宮城県多賀城跡調査研究所年報 1972 多賀城跡 昭和47年度発掘調査概報」

宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所 昭和48年3月

2 遺物

今年度調査における出土遺物は、ほとんどが木質遺物と土器類によって占められる。他には若干の銭・用途不明の土製品・鉱滓・果実の種子などが見られる。

木質遺物はそのほとんどを板材ないしは自然木が占め、いわゆる木器は少ない。土器類は壺・高台壺・蓋・甕・鉢などの器形がみられる。

(1) 木製品 (Fig 12, PL 11)

予備調査において多量の建築部材が出土して注目されたが、今回の調査でも約30点の木製品が出土した。出土木製品は水田畦畔材、飲食用具、建築部材、その他、に大別される。

水田畦畔材 SA001 杖列から15点の木製品が出土したが、そのうちに矢板材が6点、杖材が6点ある。矢板材はいづれも下半部がわずかに残存するのみである。現存する大きさは、長さ7~25cm、幅4~10cm、厚さ0.8~1.9cmで、先端を鋭く削いである。板目材を用い芯に近い面は荒割りで、表皮に近い面は数度の削りを施している。窓口のあるものはない。矢板材の向きは溝側に表皮に近い面を向けたものが多い。杖材は溝の外に打ち込まれていたと思われるもので、これも下半部がわずかに遺存するのみである。全体的に腐蝕が著しいが、縦断面が斧状を呈しているものが数点あることが注目される。

飲食用具 1001はサジと思われる。柄を作り出し、表面は平坦であるが裏面に丁寧な削りを施し、丸味を出している。オケの底とみられるもの(1003~1005)が出土しており、これらは直径9.5~15.5cm、厚さ4~6mmの円形を呈する。1004・1005は半ばを欠いている。断面は平坦で周囲に丁寧なふち取りがみられる。このほか、外側に黒漆を、内側に朱漆を塗った椀の一部と思われるものが出土している。

建築部材 今回の調査では建築部材の出土はなかったが、便宜上予備調査時に取り上げた1号建築部材(大斗)、7号建築部材(肘木)について説明を加えよう。斗(Fig 13)は平斗幅約30.5cm、平斗尻幅21.0cm、木口斗幅28.2cm、木口斗尻幅19.1cm、斗せい23.0cm、敷面せい19.2cm、斗尻せい6.9cmを測る。敷面裏には直径約3.3cm、深さ約3.6cmの円形のホゾ穴が認められる。幅に比してせいが高く、斗繰りも勇壮である。針葉樹を用い、調整は良好である。肘木(Fig 14)は上端幅92.0cm、下端幅71.2cm、木口幅15.7cm、肘木せい20.5cm、木口せい10.2cm、下端の斗幅に相当する部分で17.7cmを測る。上端に幅37.9cm高さ最大径13.4cmの面取りをもつ。木口の中間程に角をもち、下半部が弯曲する。下端は平坦である。針葉樹を用い、側面と上端に丁寧な手斧による調整を行なっている。

その他 1002は断面ほぼ長方形の木材の一端に柄状の作り出しを設け、下端に抉りをもつ。両脇が欠けているため用途は不明である。このほか、直方形に幅3cm厚さ1cm程の面取りを施した材が16点ほど出土している。

(佐藤庄一)

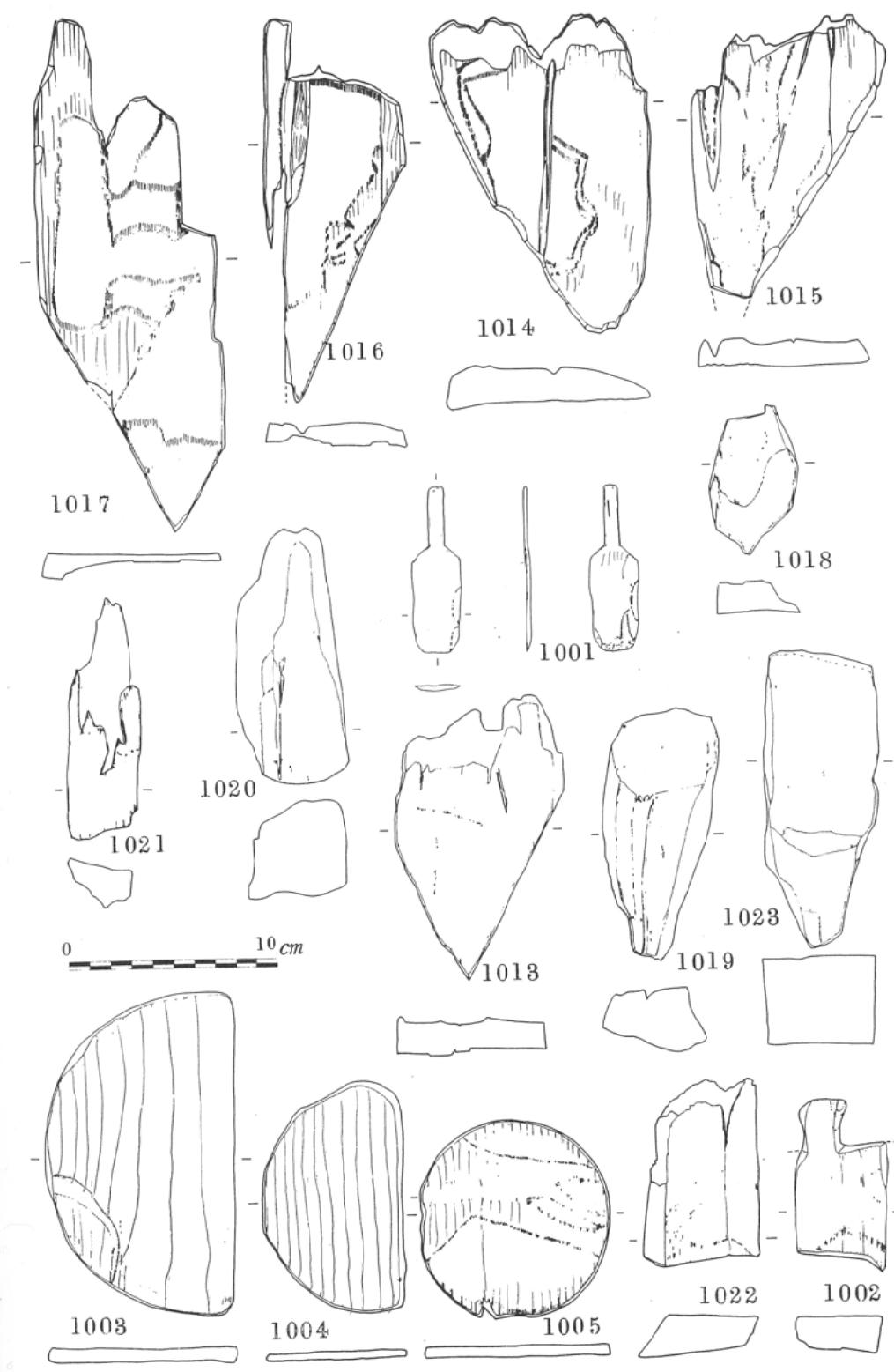


Fig 12 出土木製品実測図

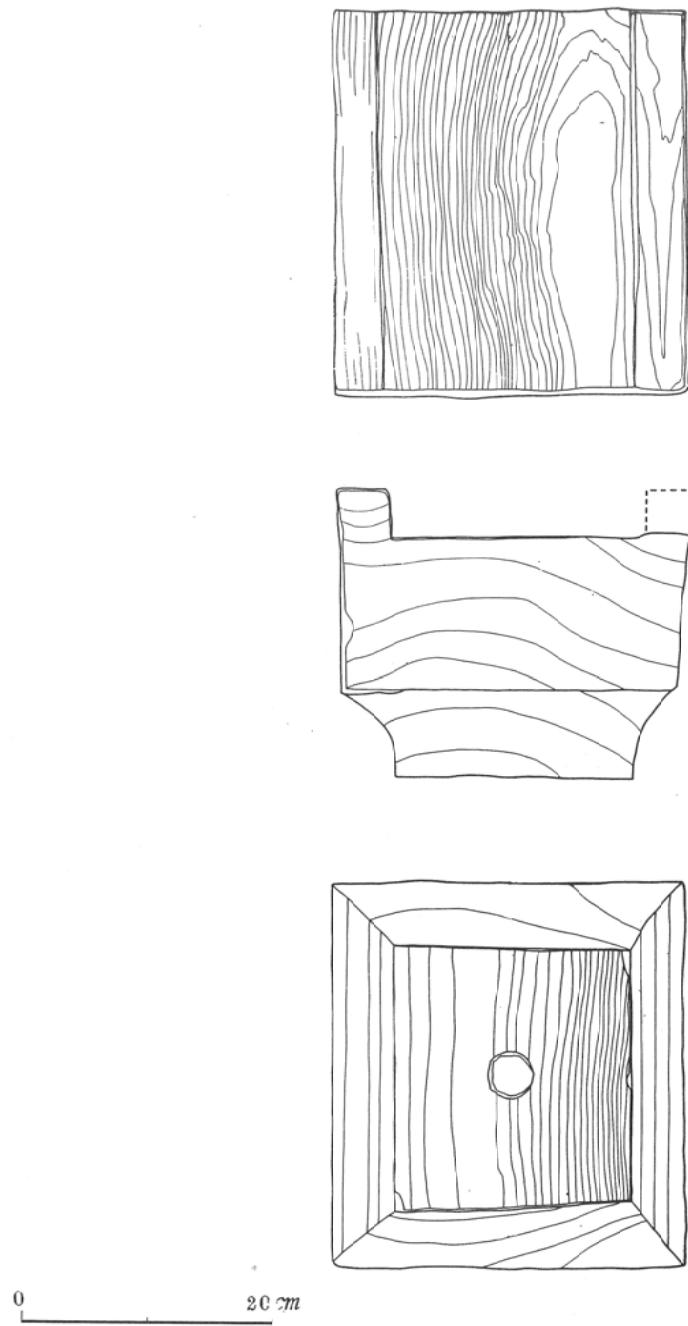


Fig. 13 出土大斗実測図

—20—

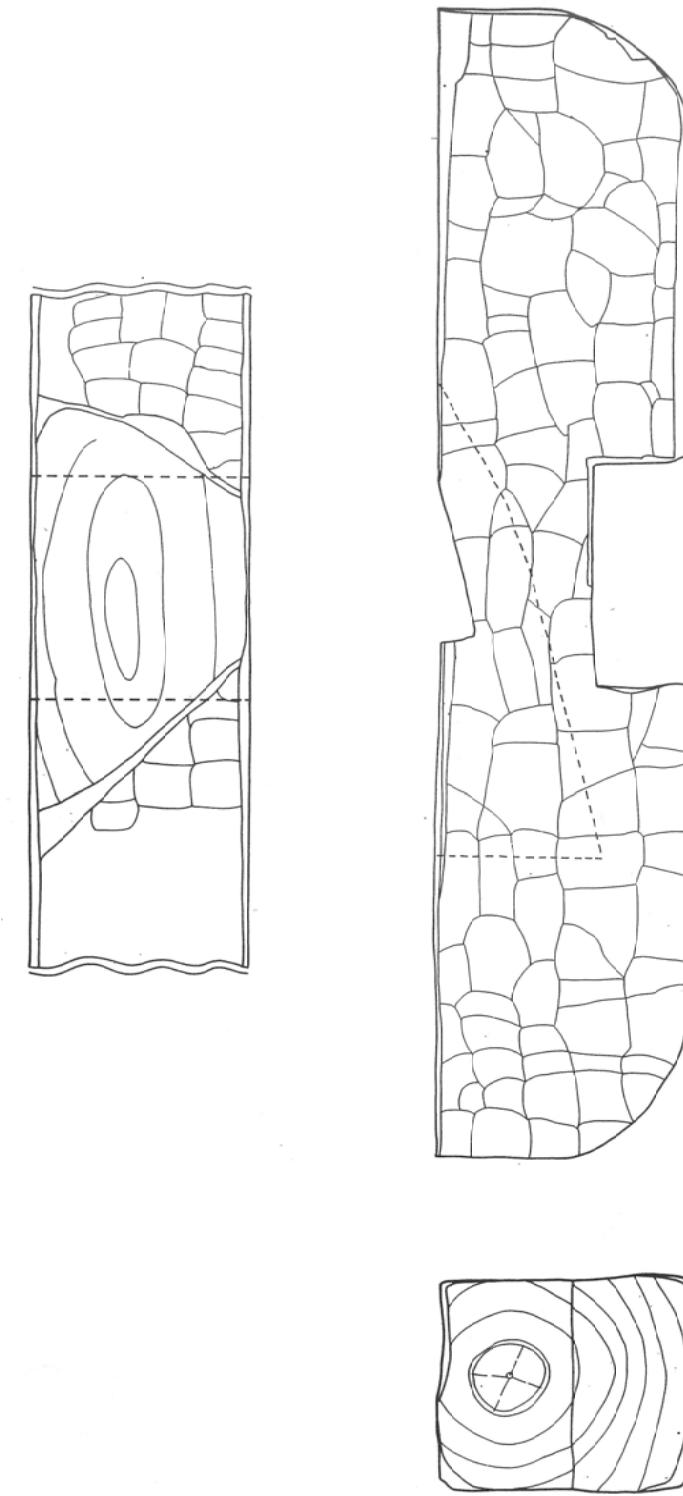


Fig. 14 出土大斗実測図

—21—

(2) 土 器 (Fig 15, P L12)

土器は次の様に大別した。すなわち、土師器・須恵器・酸化炎焼成須恵器（註1）・陶磁器の4種である。陶磁器は整理分類が不充分であるので、これに関する写真（口絵2）を載せるにとどめ、詳細は後日に俟ちたい。

土器の概要は表によって示した。表の遺物番号は挿図番号、図版番号と共に通である。

土師器（1）

遺物 番号	器 形	計測値 (%)			色 調	胎 土	焼 成	切り離し 技 法	再 調 整	備 考
		口径	底 径	器 高						
2078	杯	144	52	48	暗褐色	良	良	回転糸切	内底にミガキ	
2029	杯	—	62	—	灰褐色	良	可	回転糸切	内面にミガキ	
2015	杯	—	65	—	暗赤褐	粗砂混	良	回転糸切	なし	底部に墨書。 内面に火ダススキ様のスジあり
2090	甕	99	—	—	暗褐色	可	良			内面に輪積み痕あり、
2098	甕	109	—	—	黒褐色	良	良			外面に炭化物付着

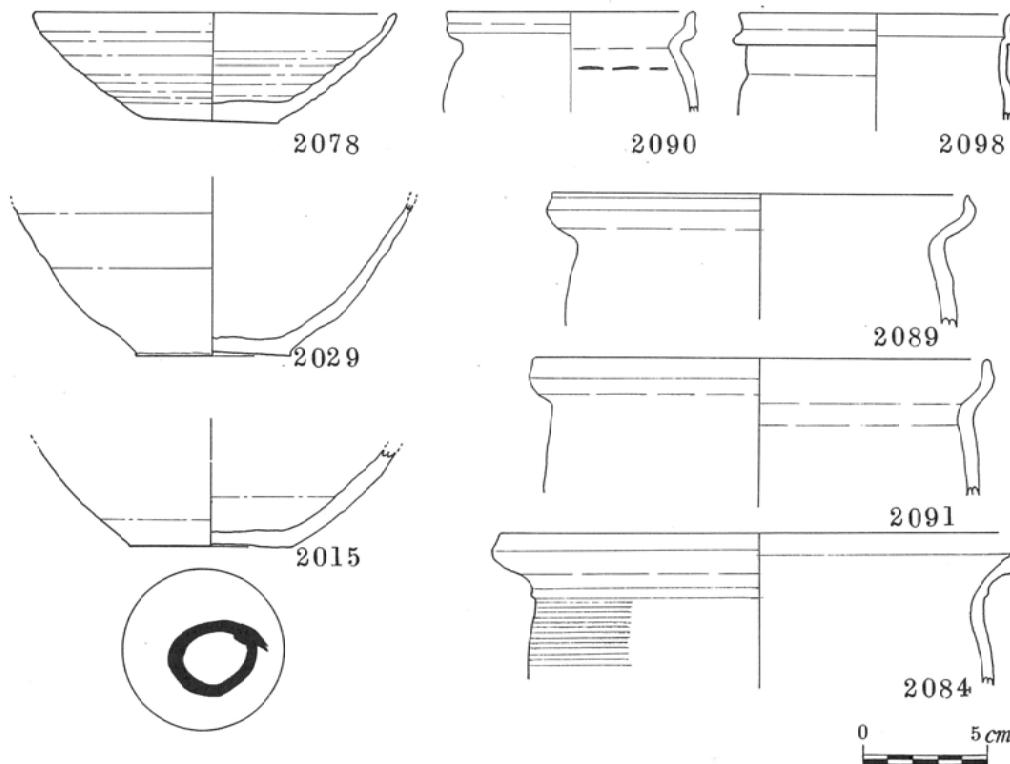


Fig 15 出土土師器実測図(1)

土師器(2) (Fig 16, P L12)

遺物 番号	器 形	計測値 (%)			色 調	胎 土	焼 成	切り離し 技 法	再 調 整	備 考
		口径	底 径	器 高						
2051	甕	—	60	—	黒褐色	良	可	回転糸切		
2094	甕	—	108	—	淡褐色	良	可			
2092	甕	173	—	—	黄褐色	粗砂混	良			
2086	甕	181	—	—	黒褐色	良	良			
2024	甕	206	—	—	暗褐色	良	良			

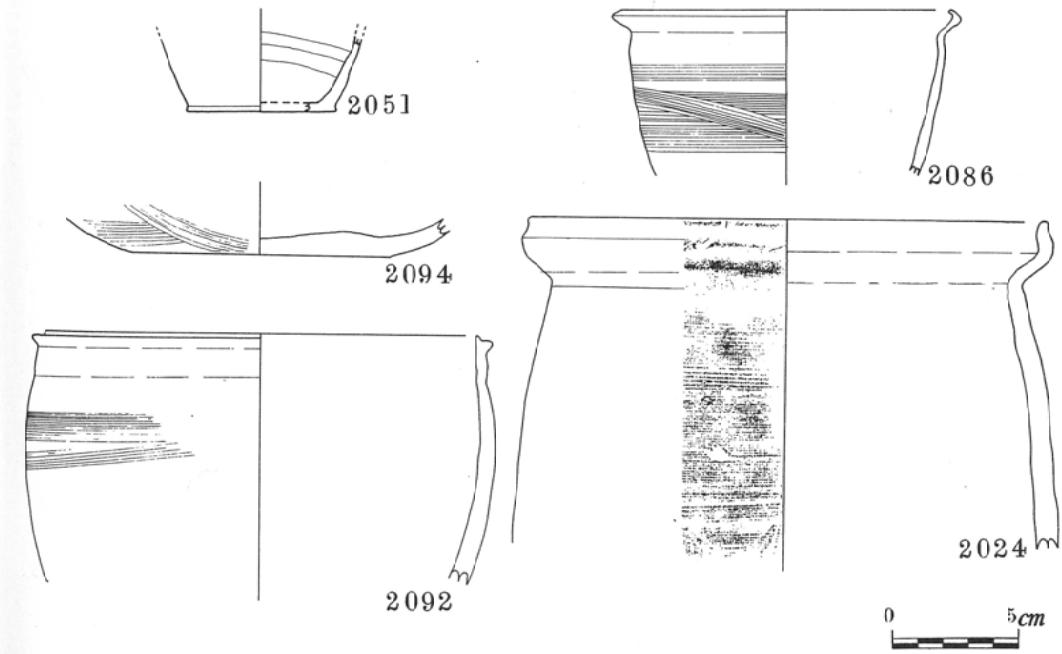


Fig 16 出土土師器実測図(2)

須恵器(1) (Fig 17, PL 12)

遺物番号	器形	計測値(%)			色調	胎土	焼成	切り離し 技法	再調整	備考
		口径	底径	器高						
2009	杯	130	60	34	暗灰色	粗砂混	良	ヘラ切	体部下半及び	
2055	杯	—	53	—	灰白色	良	可	ヘラ切	底部外周ナデ	
2016	高台杯	133	59	47	暗青灰	粗砂混	良	ヘラ切	高台内外ナデ	体部に墨書
2014	高台杯	153	63	71	暗灰色	良	良	ヘラ切	高台内外ナデ	
2007	杯	128	59	41	灰白色	良	可	回転糸切	なし	内面に漆遺存、底部に墨書
2059	杯	(138)	(59)	(38)	灰白色	粗砂混	良	回転糸切	なし	
2004	杯	126	56	36	暗灰色	粗砂混	良	回転糸切	体部下半ナデ	
2006	杯	138	55	44	暗灰色	良	良	回転糸切	なし	
2027	杯	126	57	37	暗灰色	良	良	回転糸切	なし	

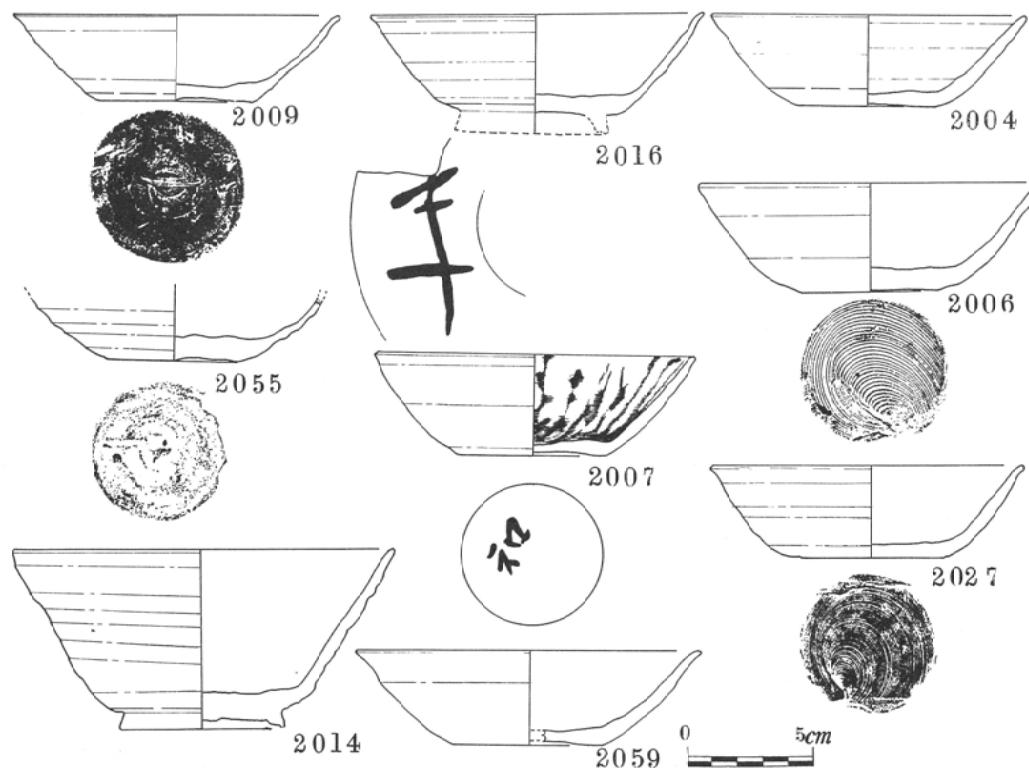


Fig 17 出土須恵器実測図(1)

須恵器(2) (Fig 18, PL 12)

遺物番号	器形	計測値(%)			色調	胎土	焼成	切り離し 技法	再調整	備考
		口径	底径	器高						
2005	杯	138	55	44	暗灰色	粗砂混	良	回転糸切	なし	底部に墨書
2028	杯	132	46	39	灰白色	良	良	回転糸切	なし	
2026	高台皿	133	62	22	灰白色	良	良	回転糸切	なし	
2083	蓋	—	—	—	暗灰色	粗砂混	良		つまみ外周をナデ	
2085	高台壺	—	112	—	灰色	良	良			
2010	蓋	165	—	(34)	灰白色	良	良		つまみ外周～肩にケズリ	
2011	高台壺	—	80	—	暗灰色	良	良	ヘラ切	高台内外ナデ	焼成高温のため気泡生ず
2097	甕	204	—	—	灰色	良	良			

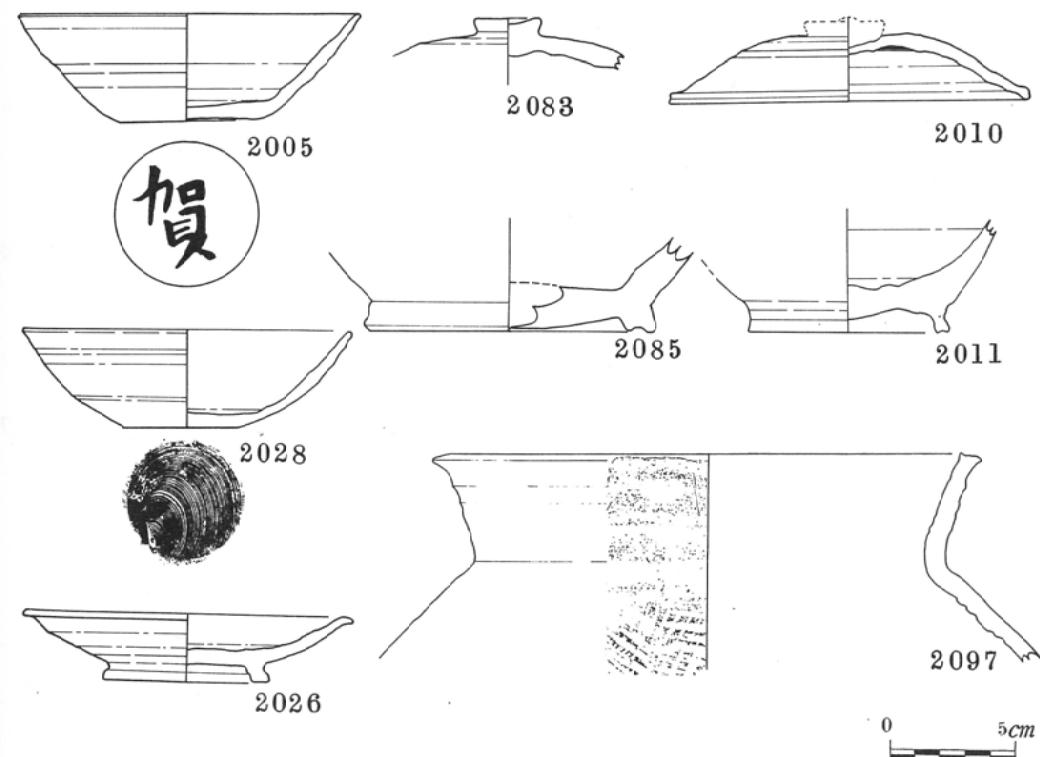


Fig 18 出土須恵器実測図(2)

酸化炎焼成須恵器 (Fig 19、PL 12)

遺物番号	器形	計測値 (%)			色調	胎土	焼成	切り離し 技 法	再調整	備考
		口径	底径	器高						
2068	杯	114	51	52	淡赤褐	良	良	回転糸切	なし	
2052	杯	117	51	50	暗褐色	粗砂混	不可	回転糸切	口縁部ナデ	
2013	杯	124	45	48	淡褐色	石英混	不可	回転糸切	なし	
2064	杯	145	70	44	赤褐色	粗砂混	可		なし	
2008	杯	122	49	44	暗褐色	良	可	回転糸切	なし	
2074	杯	140	71	34	淡赤褐	良	良	ヘラ切り	なし	
2082	杯	185	51	44	明灰褐	粗砂混	不可	回転糸切	体下半ケズリ 口縁内外にスス付着	
2081	杯	187	57	49	淡赤褐	粗砂混	可	回転糸切	なし	体部に墨書

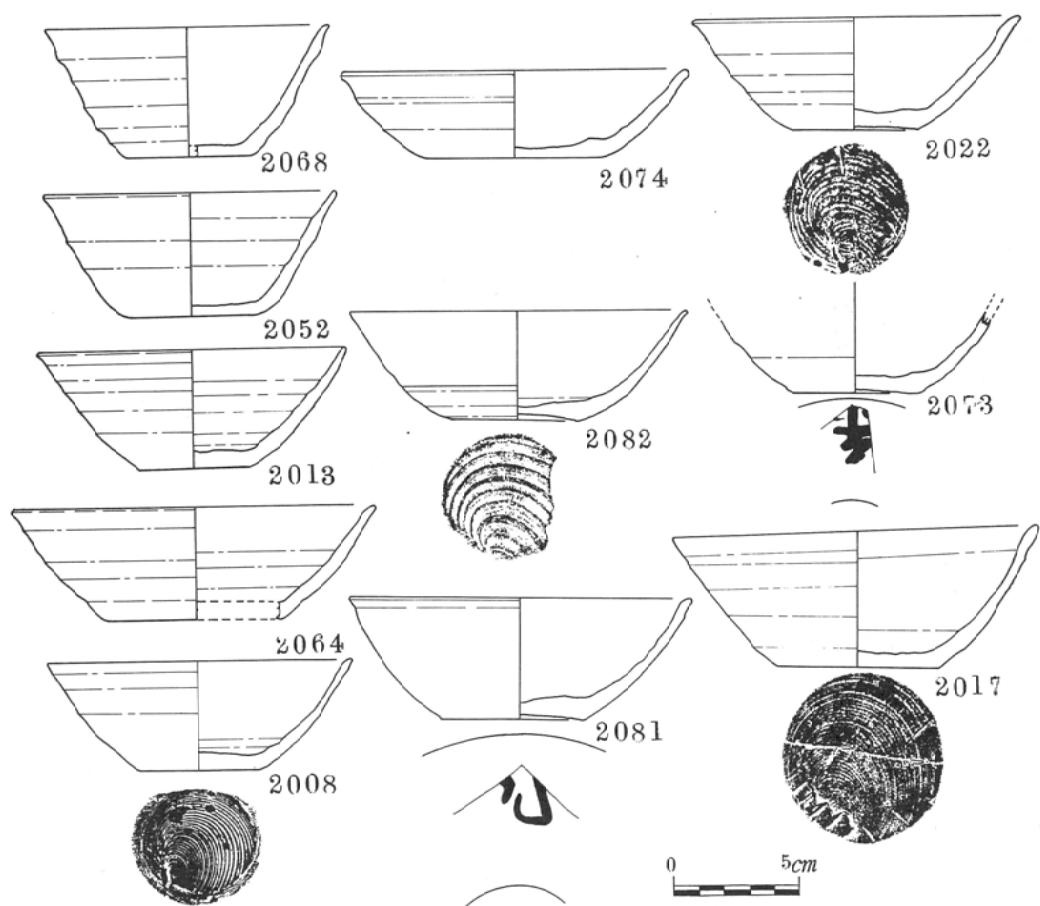


Fig 19 出土酸化炎成須恵器実測図

遺物番号	器形	計測値 (%)			色調	胎土	焼成	切り離し 技 法	再調整	備考
		口径	底径	器高						
2022	杯	181	51	45	褐色	粗砂混	可	回転糸切	なし	外面の樹脂様塗布
2073	杯	—	51	—	灰赤褐	粗砂混	可	回転糸切	なし	外面に墨書
2017	杯	147	65	55	明褐色	粗砂混	不可	回転糸切	なし	

(3) その他の遺物 (Fig 20、PL 13-上)

木器・土器の他はこの項にまとめた。次に概略説明を行なう。

3001～3005 は直径 3 cm 内外の円筒形もしくは円錐台形を呈する手捏ねの土製品であるが、用途その他については不明である。一般に焼成は良好である。3003 は他に比して扁平であるが、これらは穿孔を有する点で共通する。3004 は半ばを失なっているので不明だが、3001、3002 は穿孔を試みている。

3006 は酸化炎焼成須恵器の底部を加工した紡錘車であろう。底部外面にあたる部分に糸切り痕が一部残る。周辺部は打ち欠いたものらしく、わずかにそのあとがうかがえる。

3007 は土師器（飴か？）の把手である。黄褐色を呈し粗砂を多く含むが焼成は良好である。

3008 はフィゴの羽口である。些少な破片であるが図上復元によって外径約 5.9 cm、内法約 2.6 cm の略測定を得た。外表部は高温を受けたため海綿状を呈しており、とくに先端にはカーボンが沈着している。内面は滑らかで赤褐色を呈する。

5001 は長さ 6 cm、幅 4.5～5 cm、厚さ 0.7 cm 内外の平面台形を呈する鉄片である。2 次加工を先にひかえた延べ板とも思われるが、不明である。

5002～5005 は古銭である。順に皇和元宝、紹聖元宝、永楽通宝、寛永通宝と読める。

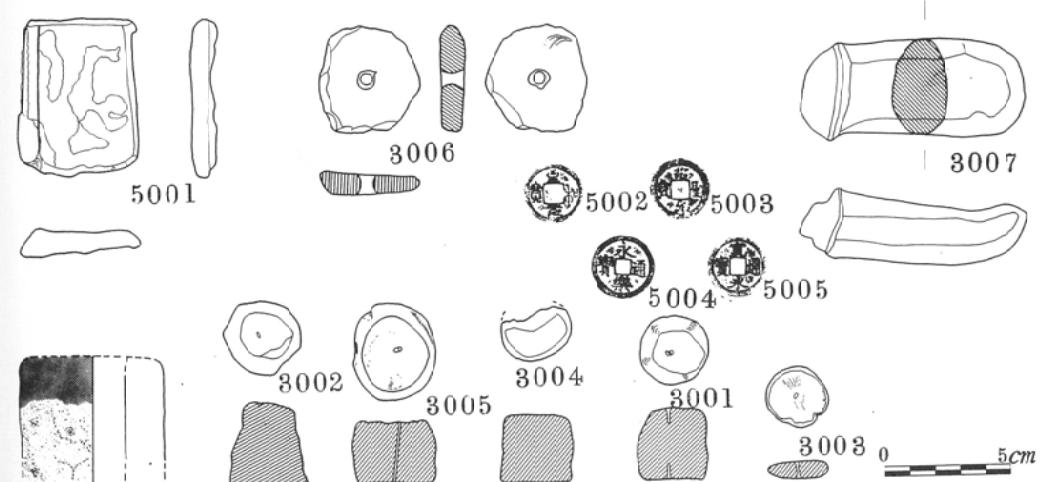


Fig 20 その他の遺物実測図

註1 いわゆる須恵系土器と酸化炎で焼かれた須恵器とは、今回便宜的に酸化炎焼成須恵器として包括した。勿論これは暫定措置であって、資料の累積に伴なって分析、細別していきたい。

(尾形與典 舟山良一)

IV まとめ

以上堂の前遺跡の第1次発掘調査の内容を報告した。最後に報告した諸事実を要約して本書のまとめとしたい。

- 1) 予備調査で発見された建築部材は、SB001基壇を構築するための筏地業であることがほぼ明らかになった。ただしSB001基壇は、それ以前の廃絶した基壇建物を利用して築いた可能性が高く、筏地業に使用されている建築部材が建物として存在した時期は、SB001基壇の時期より相当古く考えることができる。
- 2) SB002・4掘立柱遺構は、掘り方および柱痕の様相からみて、かなり大規模な建築物の1部をなすものと考えられる。これにより堂の前遺跡には、今回の発掘区以外にも数棟の同様な建築跡が存在することが予想される。
- 3) SA001杭列、SD001溝状遺構、SX002石組遺構など、堂の前遺跡には建物跡のほかに種々の遺構が存し、しかもその成立時期にかなりの幅をもつものと思われる。
- 4) 出土遺物については、土器・木製品とも十分な整理ができず、資料の列挙におわってしまった。山形県における須恵器の研究はようやく緒についたばかりであり、今後の資料の増加を待ちたい。また木製品の豊富さは改めて注目されるところであり、系統的整理の必要を感じている。
- 5) 堂の前遺跡の範囲については、今回の調査の主目的であったにもかかわらず、依然として不明な点が多い。東西は180mという今回の調査区よりさらに広がり、南北はVIA66～68区で北限に関する一資料を得たに留まった。
- 6) より重要なことは、堂の前遺跡を中心とする古代の遺跡群の様相である。城輪柵跡や泉谷地古窯跡群等の関連など重要な問題点は多い。そのためにも堂の前遺跡をはじめ周辺遺跡の早急な保存対策が望まれる。

末尾になるが、今回の調査はあくまで遺跡の範囲確認を主としたため、遺構については存否確認に留めざるを得なかった。加えて多量の湧水のため調査の進行が思うにまかせなかつたことが多い。次年度以降の継続調査においてその欠を補ってゆきたい。

(尾形與典 佐藤庄一)

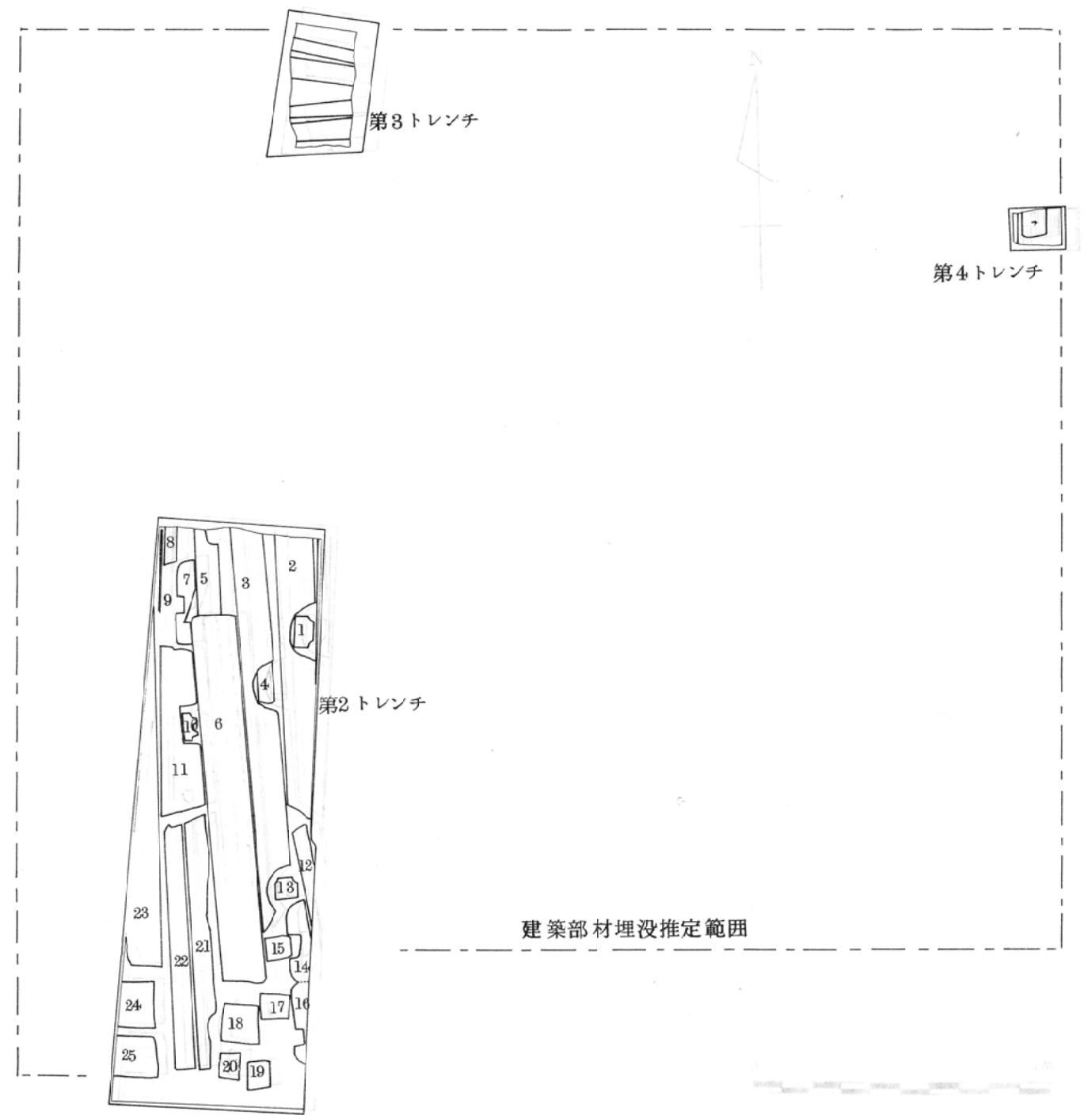
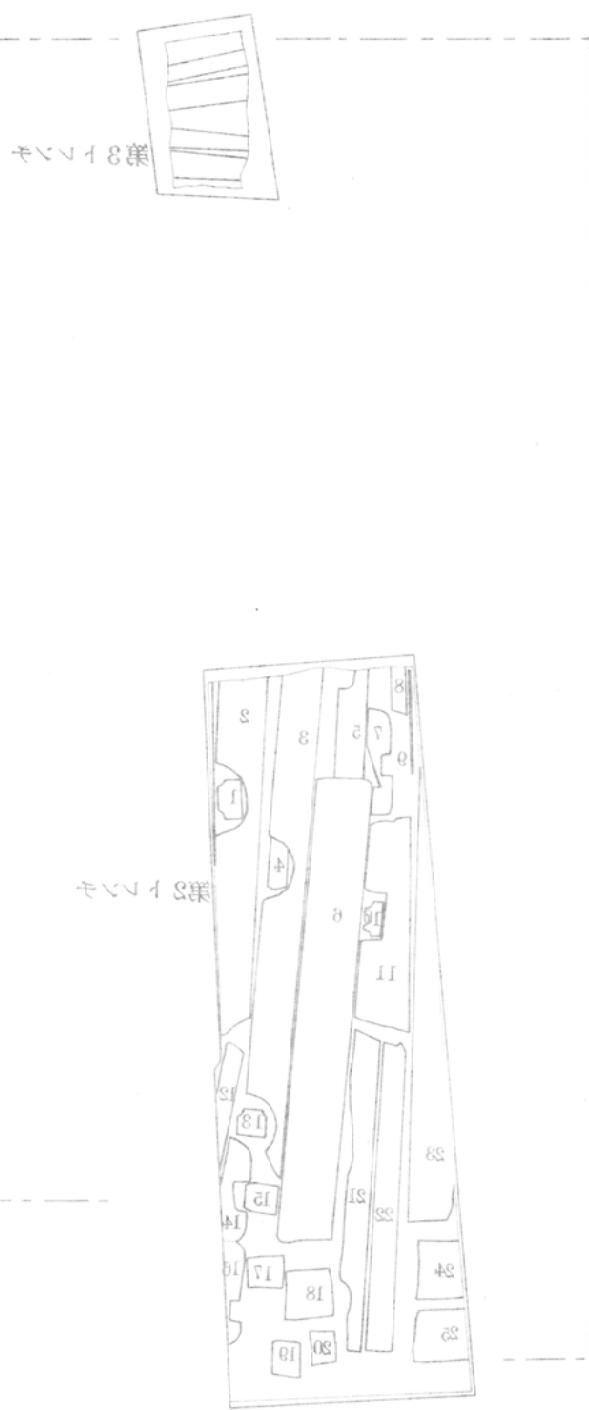


Fig. 1-1 建築部材埋没推定範囲

宝塚野黒林暗渠図

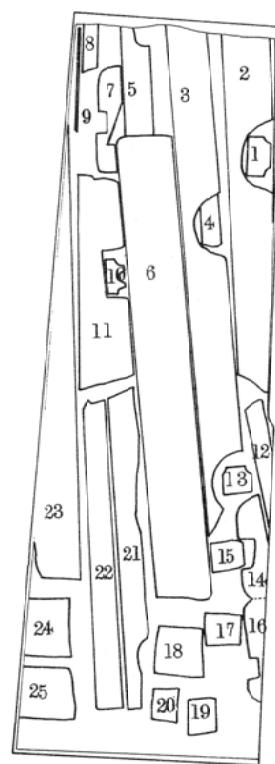




第3トレンチ



第4トレンチ



第2トレンチ

建築部材埋没推定範囲



Fig. 22 SB 001基壇・SB 003建物跡実測図

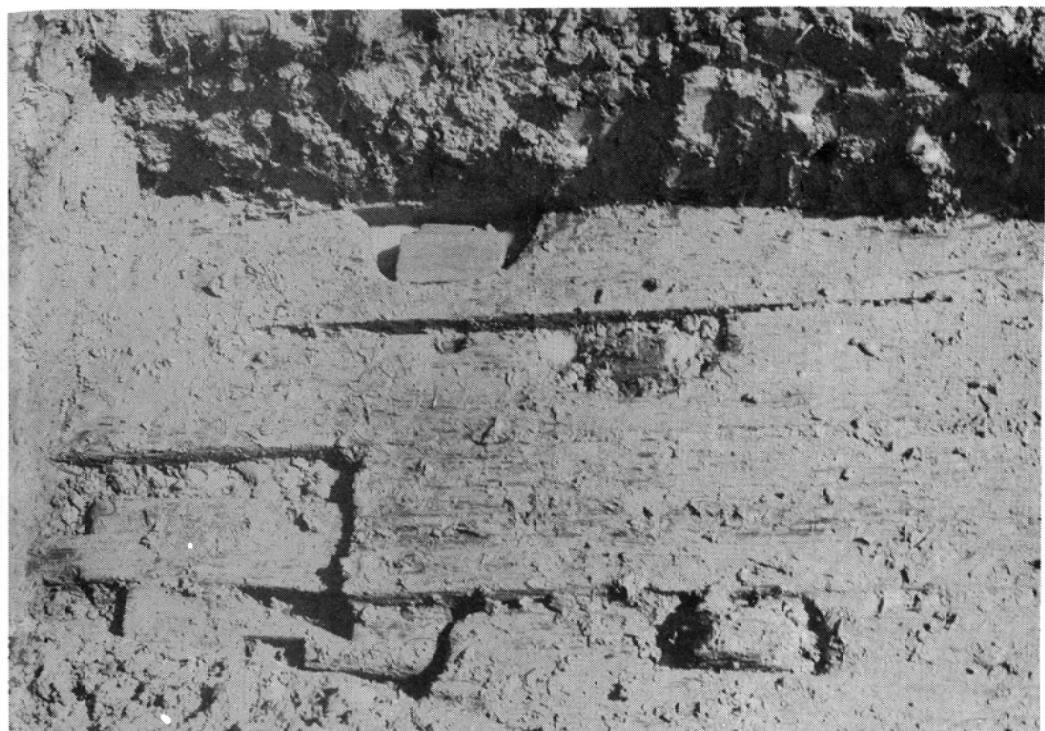
図 版



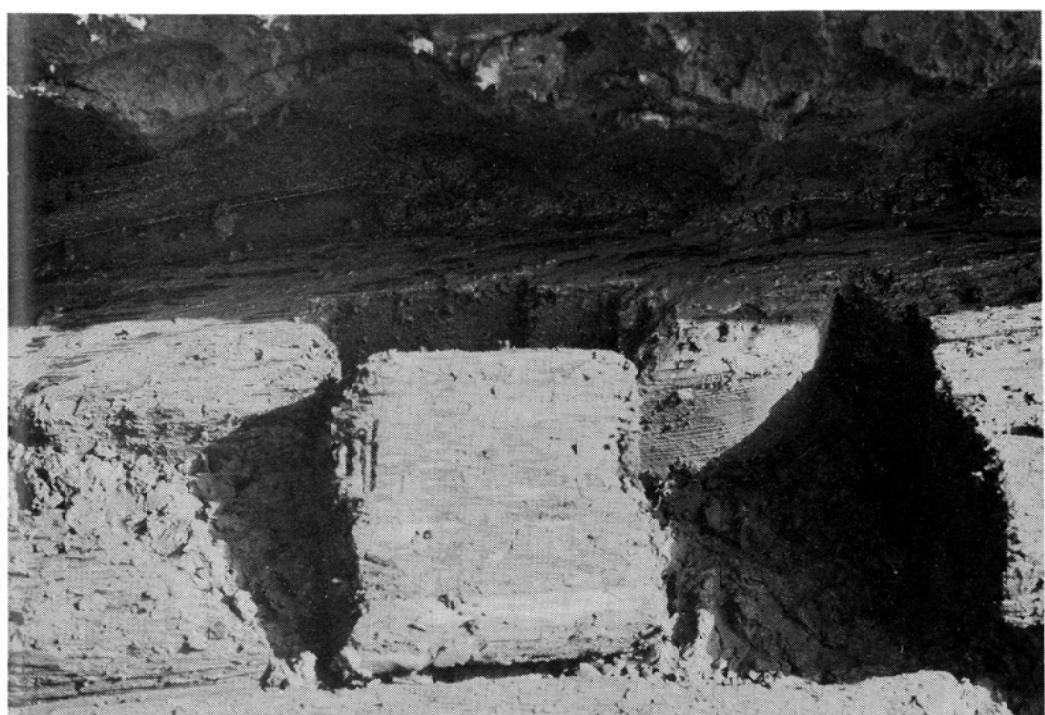
1 遺 跡 景 観



2 第 1 次 調査 発掘 状況



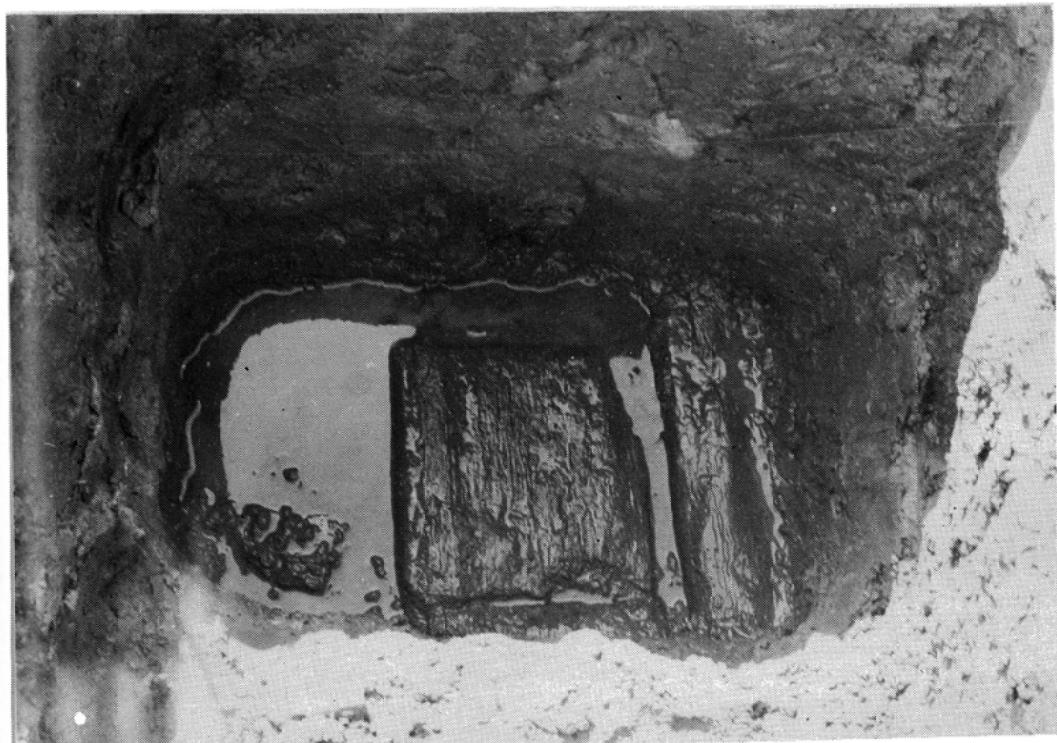
1 予備調査第2トレンチ(部分)



2 予備調査第2トレンチ 肘木出土状況



1 予備調査第3トレンチ



2 予備調査第4トレンチ

P L 4



1 S A O O 1 桩列



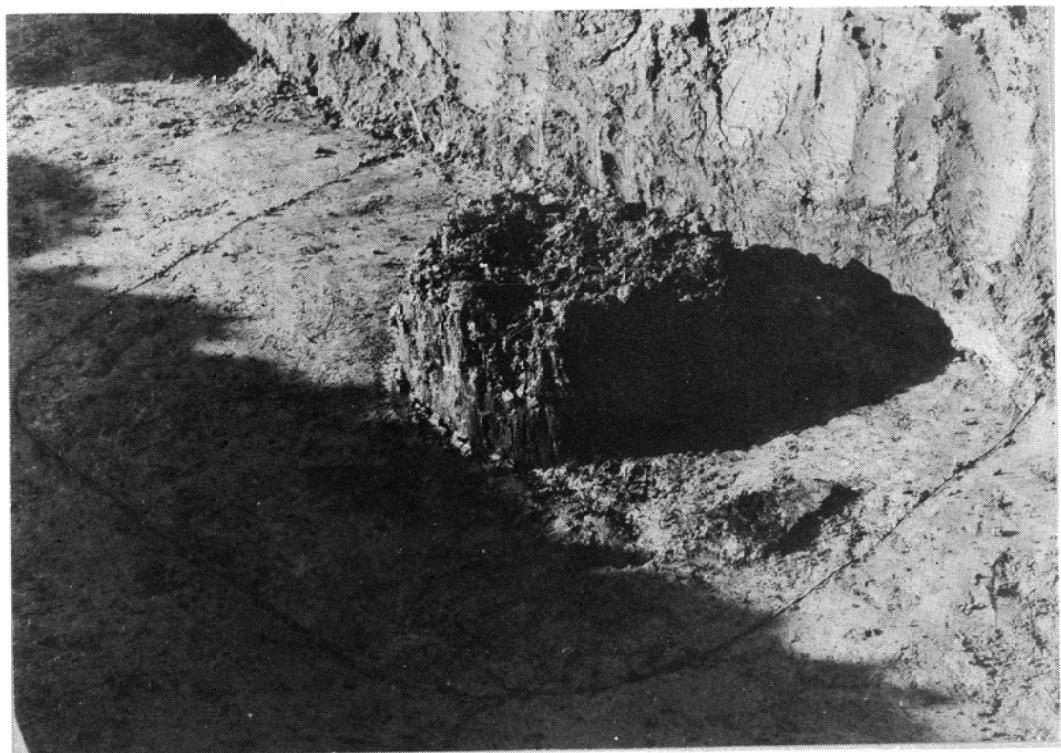
2 S A O O 1 桩列 壕下打状况



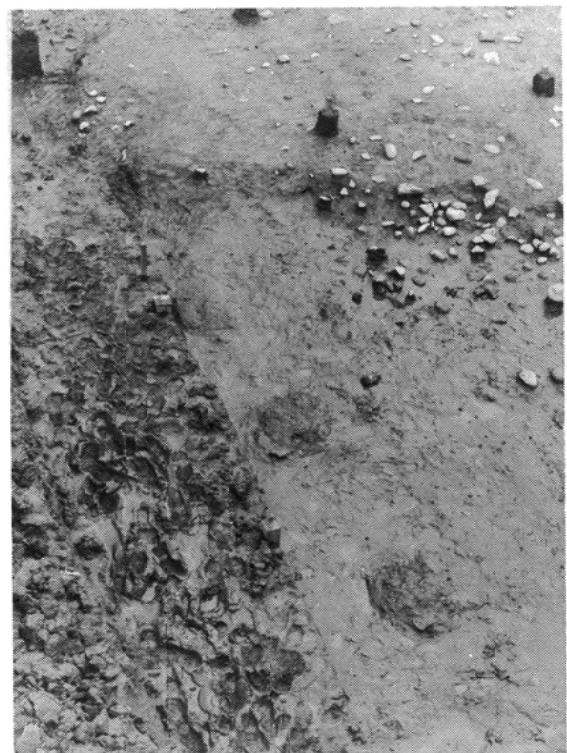
1 S B O O 1 基壇



2 S B O O 1 基壇発掘風景



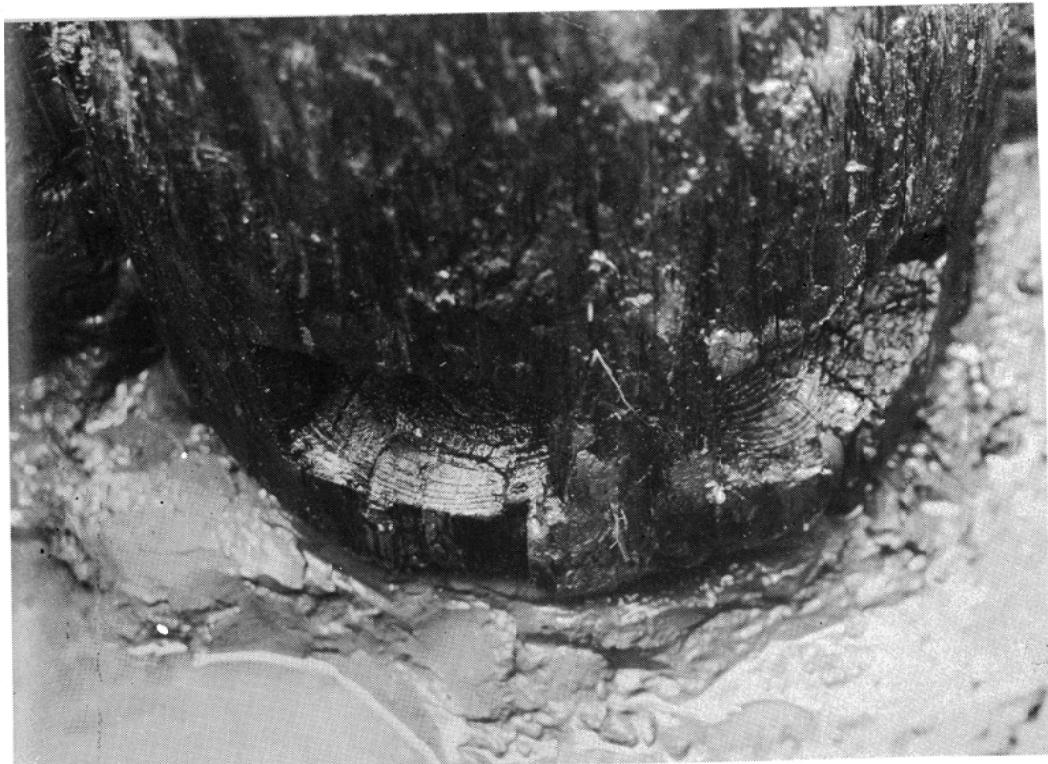
1 S B O O 2 挖立柱遺構



2 S B O O 3 建物跡



1 S B O O 4 振立柱遺構



2 S B O O 4 振立柱遺構柱根部

PL 8



1 SD001溝状遺構



2 SD001溝状遺構覆土上面の遺物



3 SD001溝状遺構内遺物

P L 9



1 SX002石組 遺構



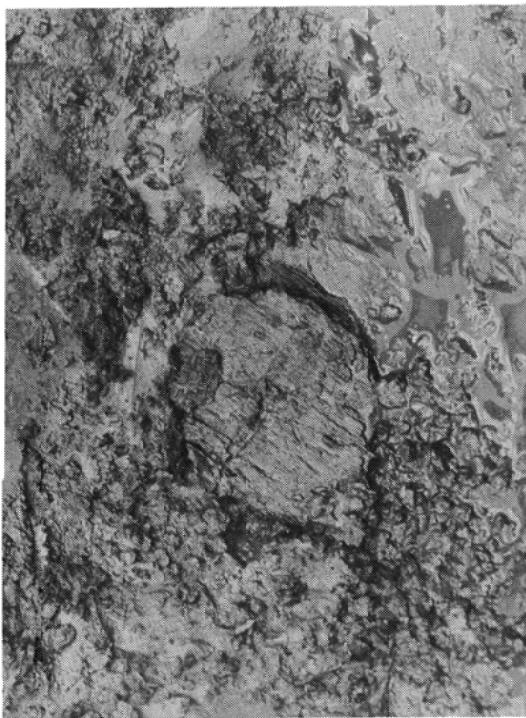
2 VII A 66 ~ 68 区

(4)



遺物出土状況

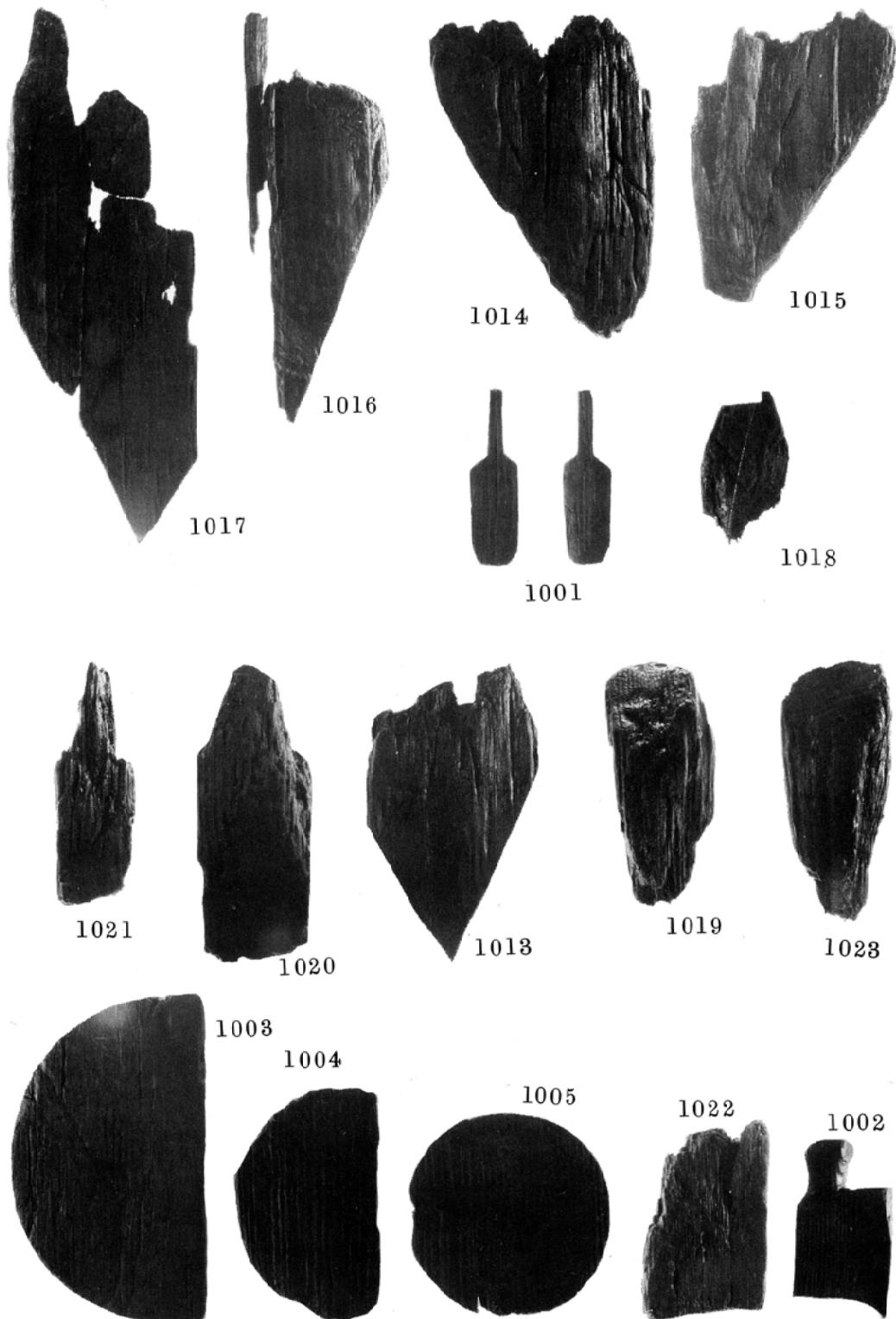
(1)

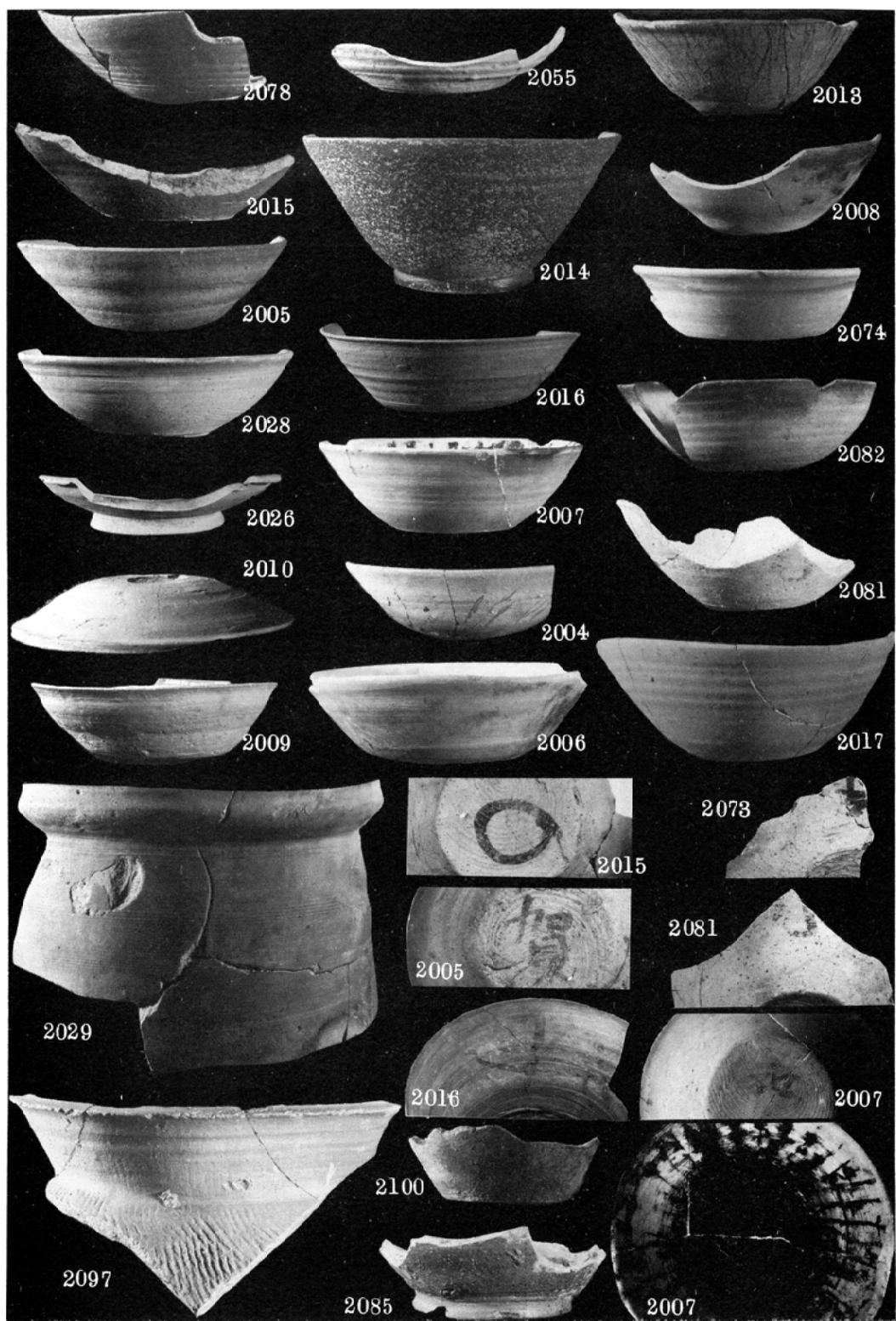


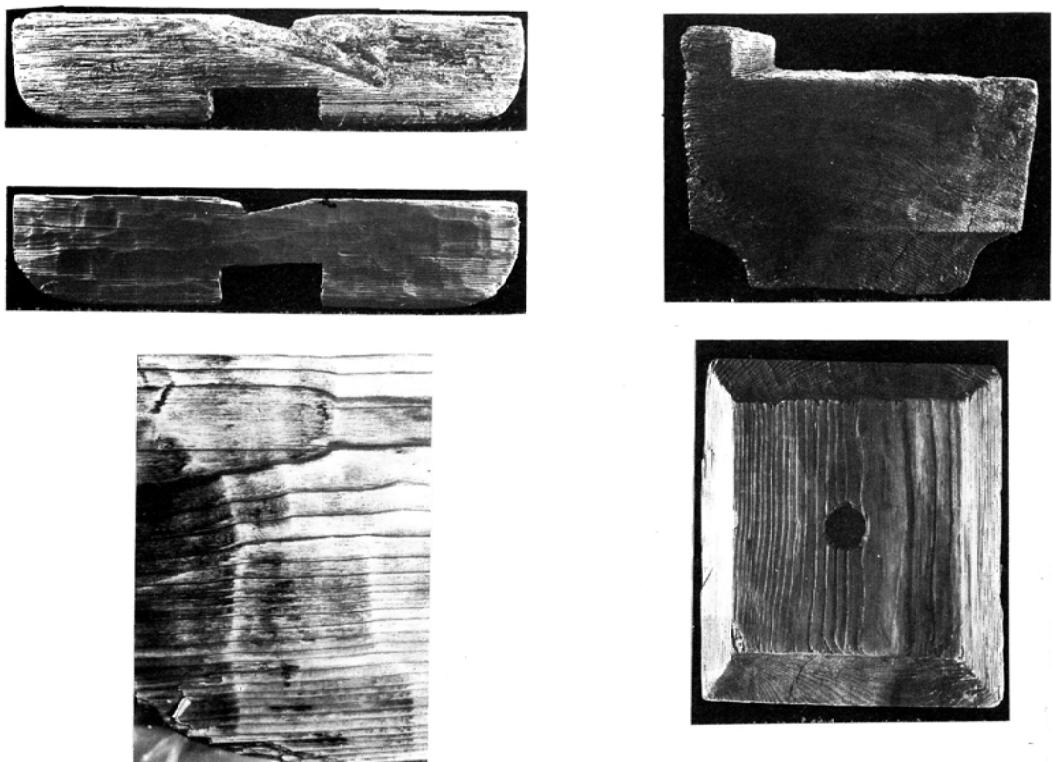
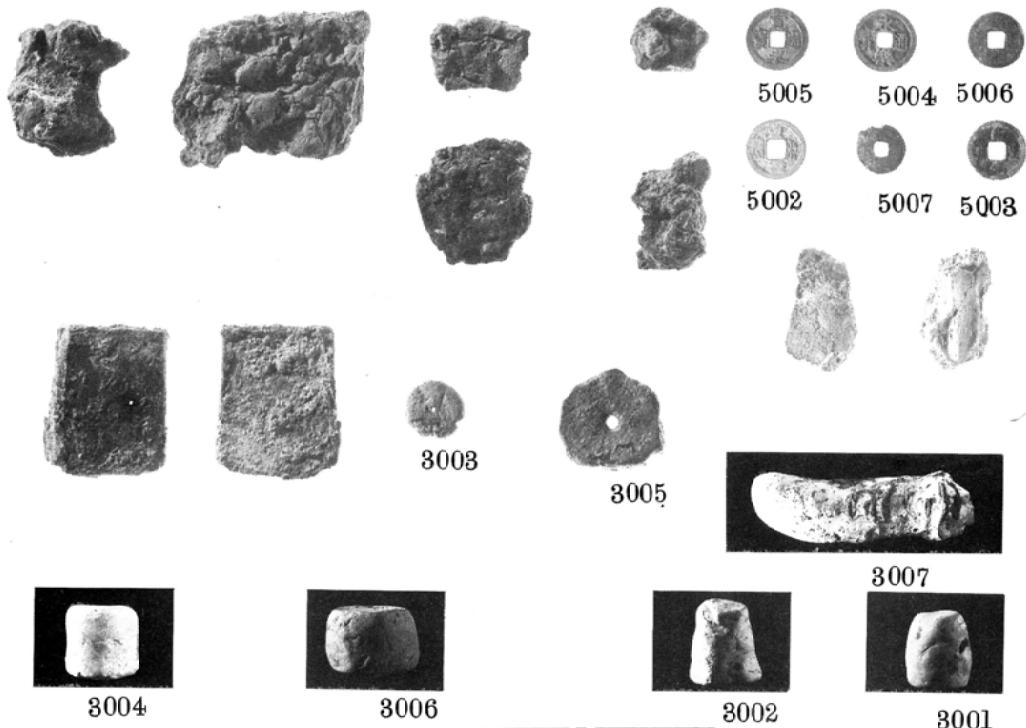
(2)



PL 10







上 その他の遺物 下 斗、肘木

山形県埋蔵文化財調査報告書第5集

堂の前遺跡

第1次調査報告書

昭和50年3月25日 印刷

昭和50年3月31日 発行

発行 山形県教育委員会

教育庁 文化課

印刷 大風印刷
